
だいぼうけん

ロボ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

だいぼっけん

【Nコード】

N61860

【作者名】

ロボ

【あらすじ】

いとこどうしで幼なじみの、高月周哉と高月遙。5年生の夏休み、二人で東京に遊びに行くことに。こどもだけでの、はじめての旅。けれど出発当日にいきなり旅行を止められて、二人は家出をすることに。楽しい旅行のはずが、旅先で誘拐されてしまい…？完結しました。

第一話 そんなはじめり（前書き）

いとこどうしで幼なじみの、高月周哉と高月遙。5年生の夏休み、二人で東京に遊びに行くことに。こどもだけの、はじめての旅。けれどなんだか、おかしい雲行きで…
小学生二人の推理です。

第一話 そんなはじまり

休みの日はいつだって、ベッドのなかでごろごろしてる。半分寝たまま、とろとろすこす。

とくに今は夏休みだ。学校のない日がズーッと続く。

ということは、こんな幸せな日が毎日続くということだ。

けれど先生も、こんなぐうたらな毎日を生徒に送らせないように、ちゃんと陰謀を巡らせている。

そしてその陰謀の手先の声が、窓の外から聞こえてくる。

「しゅーちゃん、時間だよー！」

聞き慣れた声。そう、いつもどおり、遙のやつだ。

「うるさいなあ……」

ふとん代わりのシーツをひつかぶって聞こえないふり。

「起きてよ、しゅーちゃん！ラジオ体操の時間でしょー！」

騒ぎ立てるハルの声を無視して、ぼくはベッドにしがみつくと、ドアが開いて、

「しゅーちゃんっ！」

叫び声といっしょに、衝撃が走った。

「うぐっ」

「起きてよー起きてよー！」ぼくの上で、ハルがばたばた暴れる。両側で結んだ髪が、ぽんぽん揺れてる。

「なにすんだよっ！」

「起きない方が悪いんでしょー！」

「重いからどけっ！」

「ひどいよ、私重くなんかないよ！」

「わかったから降りろっ！」

まだ何かいいたそうなハルを追い出し、いやいや着替える。

半分寝たまま外に出ると、母さんとハルが話していた。

「いつもありがとうね、ハルちゃん。しゅーくんのお守りも大変でしょ？」

ちよつと待った。それには異議がある。

「お守りしてるのはこっちのほうだ……」

「なーにいつてるの、いつも起こしてもらってて」母さんが、ひらひらと手を振る。

「起こしてもらってるだけだ！だいたい、ハルだってほんと朝全然起きないじゃないか！どうしてぼくを起こすときだけ早いんだよ！」

「おかーさんがおこしてくれるもん！」

「……」

ぼくは、ちらつと母さんの方を見た。

母さんも朝が弱い。

「いいじゃないの、ちゃんとハルちゃんに起こしてもらえるんだし。こーんな可愛い子に毎日起こしてもらえるなんて幸せ者よ？」

…… かーさん、逃げた。

「それより、早くしないと遅れるよ？」

いわれて時計を見た。5分前。

ぼくはハルと顔を見合わせ、それから、

「やばっ、遅れるっ！」

玄関から慌てて飛び出した。

一足先に出たハルが、ぼくの方を見て叫ぶ。

「しゅーちゃん、早く早く！」

「わ、バカ、前！」

「え？」

叫んだときには遅かった。

前にあった自転車に、ハルがぶつかって、みごとにころぶ。

ああーあ、ぶつかった……

「ドジ」

ひとことだけいつてやる。

「うっー……」

不満そうなハルに、手を貸してやる。

「ほら、いくぞ」

「……うん！」

握り返してきたハルの手を引いて、ぼくはまた走り始めた。

公園からの帰り道、ぼくはハルに聞いてみた。

「そう言えば、今年はうちはどこにいくの？」

ラジオ体操で押してもらったスタンプをふりまわしながら、ハルが口をとがらせる。

「それがさー、今年は忙しいからってどこもつれてつてくれないんだよ。ひどいよー、たのしみにしてたのにー！」

「うえー……」

ぼくの家とハルの家は、毎年一緒に旅行に出かけていた。

今年ハルの家がどこにも行かないって事は、うちもどこにもいかなってことだ。

「今年は旅行なしか……」

「そのことなんだけど」

ふいに、ハルが口を開いた。

「とーさんとかーさんが忙しいから旅行に行けないんだよね？」

「……うん」

「だったらさー……」

遙がにこにこ笑ってる。目なんかきらきらかがやいてる。

こんなとき、たいていとんでもないことを考えてるんだ、遙は。身構えるばくに気づいたかどうか、遙は元気いっぱいに言った。

「わたしたちだけでどっかいけばいいんだよ！」

「ぼくらだけで？」

「そう！もう五年生なんだし、それぐらいできると思っよ」

……ハルと二人で旅行か。

「……おもしろそう！いいね！」

「じゃ、決まり！」

うれしそうに、遙が叫んだ。

「ところで、どこにいきたいの？」

「うーんと……」

相変わらずスタンプ帳を振り回しながら、ハルが考える。

「東京がいい！」

「東京？」

「うん！デイズニールランドとか、テレビ局とか、渋谷とか。いつもテレビに出てるのとおんなじところにいつてみたい！」

「……でも、それは遠いよ。泊まらなきゃいけないし、そうすると父さん達に許してもらえるかな？」

「行ってみなきゃわからないよ？」

「……でも……」

「あー、怖いんだ？」

ハルが、ぼくの顔をのぞき込んで言った。

「え？」

「怖いから、行きたくないんだ？」

「ばか！怖くなんかないよ！」

「怖くないんだったら、一緒に行くよね？」

「ああ！行くよ！」

そこまで言って、自分が乗せられたことに気づく。

遙はにやっと笑って、

「じゃ、決まりだね！」といった。

うちの前につく。すぐとなり、うちとおんなじ「高月」の表札。
ハルの家だ。

むかしここにあったおじいちゃんの屋敷を、兄弟二人で分けてそれぞれ家をたてたんだそうだ。

だから、ぼくとハルはいとこということになる。

「じゃ、すぐに父さんに話してみるよ」

「じゃ、またあとでね！」

そう言つて、家の前でぼくはハルと別れた。

「だめ」

ぼくの頼みに、父さんは簡単に答えた。

「どうして？」

「子供たちだけじゃ危ないだろ。おまえだけならともかく、ハルちゃんに何かあつたらどうするつもりだ？」

「……でも、ハルも行きたいって……」

「だめっていつたらだめっ！ だいたい、ハルちゃん家が許すはずは……」

そこに、ハルが飛び込んできた。

「うちはOKだつて、しゅーちゃん！」

ナイス、ハル！

この攻撃に、父さんは少しひるんだみたいだつた。

「でもハルちゃん。おじさん達が心配しなかった？」

なんとか状況を変えようと、とうさんが誘導尋問する。

「ううん。『しゅーくんが一緒だったら、安心ね！』とかおかーさんがいつて、とーさんが『それもそうか』って」

期待を裏切られて、父さんが頭を抱える。

「とにかく、うちは……」

そこまで父さんがいったところで、玄関のチャイムが鳴った。

「誰だ？」

「久しぶりだな。わしだよ」

玄関を開けると、少しやせたおじいさんがたっていた。

「父さん！」

父さんの父さんって事は…

「おじいちゃん？」

「おお、周坊にハル！ひさしぶりだな！」

作蔵じいちゃんは、顔中をしわにして笑った。

おじいちゃんは、昔大きな会社をやっていた。

そのころおじいちゃんはここに住んでいて、ぼくもほんとに小さかった頃はよくつれてきてもらったらしい。

やがておじいちゃんは会社を辞めたが、そのとき会社を息子達にはつがせなかった。

そのかわりに家を息子達に譲り、自分はここから少し行ったところに小さな家を買って、そこに引ッ込んで暮らしている。けれどこうやって、たまに遊びに来るのだ。

「ところで、なにかもめとったようだが」

おじいちゃんの言葉に、お父さんが困った顔をする。

「……ねえ、しゅーちゃん」

ハルがそつとぼくに話しかける。

「わかった」

それだけいって、おじいちゃんに話しかける。

「じつは……」

話を聞き終わったおじいちゃんは、大笑いした後、

「なあ、和明。せっかくこの子らが一人でどこか行きたいなんて言い出したんだ。行かせてやったらどうだ？」

予想どおり、父さんを説得にかかった。

「しかし、子供たちだけでは……」

「二人とも、もう五年生だろう。そろそろ自分たちだけで旅行だってできるだろう。だいたい、わしが若い頃には……」

ハルと顔を見合わせて、にんまり笑う。

おじいちゃんが「わしが若い頃には」っていいでしたら、父さんがかなうわけがない。

やがて父さんが、あきらめたように首を振った。

「わかりました。わかりましたよ。確かに、そろそろ親離れさせた方がいいかもしれませんね」

「……じゃ、行つていいの？」

「まあ、しょうがないだろうな」多少きげんが悪そうに、父さんが呟く。

「やったあ！」

ハルが叫んで、ぼくに抱きついてきた。

「そのかわり、ちゃんと宿題は済ませておくこと！」

「うん！」元気よくハルが答える。

「……おい、ハル」

「んー？」

「ちゃんとやれよ、いったからには。いつもみたいに、三十一日になつて手伝わされるのはごめんだからな」

「ひどいよ、しゅーちゃん！ わたしちゃんと勉強するよ？」

……ほんとならいいんだけど。

でもここでそんなこといったら旅行に行けなくなる。だから、

「ん。わかった」とだけ、ぼくは答えた。

第一話 そんなはじまり（後書き）

自サイトで公開していたのですが、i s w e bが今日消滅すること
でこちらに投稿しなおすことといたしました。よろしくお願
いいたします。

第二話 おじいちゃんの手紙

小さく風鈴が鳴る。

外の日差しが嘘みたい、クーラーのきいた部屋は涼しい。

鉛筆の音だけが、静かな部屋に響き渡る。

いや、もうひとつ、小さな音が。

すうすうという、小さな小さな声。それにあわせて、ピンクの髪飾りが上下に揺れる。

ぼくは立ち上がった、……ハルの頭をたたいた。

「いた！」

ハルが飛び起きる。

「なにをするの！」

「こつちのせりふだっ！」

「眠いから寝る……」

「寝るなっ！だれのせいでこんな事になってると思ってるんだ？」
そいつって、真っ白い宿題のページを見せる。

「ほら、出発はあさってなんだから。とつととやるの」

「うっー……」

不満そうになった後、ハルはあきらめたらしい。とにかくぼくの向かい側に座って、宿題をせつせとやり始めた。

どうして、こんなことになったのか。

「旅行の前に、宿題は済ませておきなさい！」と、おとうさんにきつくいわれたからだ。

といっても、ぼくはともかくハルが勉強なんかやってるわけがない。だから、ぼくが新しい問題を解き、その解いた問題をハルがせつせと書き写す、なんてことになるわけだ。

「……なあ、ハル」

「んー？」

「なんか不公平な気がするんだけど」

「気のせいだよ」

「ぜーったい、ちがうとおもっけど……」

不満そうなぼくの声に、ハルがむきになる。

「こーんなかわいい子と一緒に勉強できるなんて、役得なんだよ！」
本気でいってるんじゃないことはわかったけど、それでもぼくはすこしときどきした。

じっさい、ハルはかわいい。ちょっとおてんばすぎて手に負えないし、わがままで無計画で無鉄砲でいいでしたら聞かないけれど、性格だつて悪くない……と思う。

でもここですなずいたらこいつの思うつぼだ。

「そうかな？」といって首をかしげてみる。

とたんに、ハルがむくれた。

「かわいくなーい！」

後ろから、頭をぐりぐりされる。

「かわいいって言えー！」

「やだよー！」

「まあまあ、二人とも仲がいいわねえ」

麦茶を持ってきた母さんがいった。

「仲良くなんかないよ！」大きな声で言っただけど、ハルと声が重なってしまった。

一瞬間を見合わせて、

「まねするなよ！」

「そっちこそ！」

「ふん！」

「ふん！」お互いにそつぽを向く。

「やっぱり仲がいいわねえ」なぜかくすくす笑いながら、かーさんが言う。

「ところで、おじいちゃんちに「ごあいさつ」はしたの？」

「ごあいさつ？」

「おじいちゃんのおかげで旅行に行けるんだから。二人とも、ちゃんと「ごあいさつ」してらっしゃい」

「はい！」待ってましたとばかりに、ハルが答える。

「おばさんも「ごあいさつ」してることだし、行こうよ、おじいちゃん家！」

「この宿題は、ハル？」

「いいの。宿題なんかより、おじいちゃんにお礼を言う方がずっと大事だよ」

「……おまえ、やりたくないだけだろ、宿題」

「……ほら、いこうよ！」

強引にハルが話を終わらせる。どうやら図星みたいだ。

「……まあ、いいか」

確かにハルが言うことも一理ある。

「帰ってきたら、ちゃんとやるぞ」と言っ、て、ぼくは立ち上がった。

おじいちゃんの家は、そんなに遠くはない。だいたい家から自転車で10分もあれば着く。

立派な門の前で、チャイムを押す。

「どちらさまですか？」

と言っ、て顔を出したのは、少し髪の薄くなっ、たおじいさんだっ、た。

「伏見さん！お久しぶりです！」

ハルが、元気に挨拶をする。

「おお、ハルちゃんに周ちゃんか！大きくなっ、たなあ！」

伏見さんは、おじいちゃんが会社にいたときの部下だっ、た。おじいちゃんが会社を隠居したとき、伏見さんも会社を辞め、この近くに家を建てて隠居した。よくおじいちゃんの家遊びに来ていて、ぼくも何度か会っ、たことがある。

「おじいちゃんは？」

「お部屋の方にいらつしやいますよ。ただ、今日は体調が優れないようで、お部屋で横になっていらつしやいます」

「……じゃあ、帰った方がいいですか？」

「いえいえ、とんでもない。ハルちゃん達が来てくれたら、とてもよろこばれますよ」

そういつて、伏見さんは笑った。

「それに、今ちよつと嫌なお客様がいらつしやつてて……」

「いやなお客様」

「光彦様ですよ」

「ああ……」

光彦さんは、ぼくらのおじさんにあたる。おじいちゃんともとうさんたちとも仲が悪くて、あまり家には寄りつかない。

「だから、はやめにいつて助けてお上げなさい」といつて、伏見さんは笑った。

おじいちゃんの部屋に行く手前の廊下にさしかかったとき。

「出て行け！」

おじいちゃんの、すさまじい怒鳴り声が聞こえてきた。思わず、首をすくめる。

と、ドアが開いて、40歳くらいの太った人が足音高く歩いてきた。光彦おじさんだ。

「あれ、おまえら……」

ここで会うとは思っていなかったんだろう。何か疑わしそうな顔をしている。

「なにしに来たんだ？」

「旅行に行くから、ごあいさつにきたの」ハルが答える。

「旅行？」

「うん。あのね……」

「ハル、はやくおじいちゃんのところに行かないと……」

ぼくがそういうと、ハルは急いでおじさんにあいさつをして、こつちに走ってきた。

寝室のドアをノックする。

「誰だ？」不機嫌そうな声。

「周哉です。逢もいます」というと、おじいちゃんの声が和らいだ。
「おお、周坊にハルか。よう来てくれたな！」

ドアを開けると、おじいちゃんがベッドで身を起こしていた。
ふとんの上に、古ぼけた大きなアルバムを広げている。

そのとなりには、やっぱり古ぼけた写真立てと、白黒の写真。おじいちゃんが、数人の仲間達と写っている写真だ。

「あいさつにきてくれたのか？」

「うん！旅行に行けるのも、おじいちゃんのおかげだもん！」

「そうかそうか」

ハルの言葉に、おじいちゃんが目を細める。

「ところで、どんなコースで行くつもりなんだ？」

おじいちゃんがきいてきた。

「まず夜行列車で東京に行って、それからデイズニーランドと渋谷と……」

そういつて、ぼくたちが立てた計画を話していく。

おじいちゃんは嬉しそうに、僕らの話を聞いていた。

旅行の話をして、旅行中に気をつけないといけないことについて注意されて、さあ帰ろうかと言うとき。

「ところで、ちょっと頼みがあるんだが」

そういうと、おじいちゃんは懷から手紙を取り出した。

「これを、このひとに渡してくれんか？」

そう言つて渡されたのは、ていねいな字で「仁科幸子様」とだけ書かれた書状だった。

「本当ならわしが渡すんだが、今ちよつと手が放せない用事があるてな。あっちの方に行くなら、ついでに渡しておいてほしい」
「場所はどこなのか？」

というところ、やっぱりいいないな字で書かれたメモをくれた。

「……せただに？」

「せたがやつて読むんだよ」

「世田谷って、ぼくらが行くところから少しはずれてるよ？」

ぼくの質問に、おじいちゃんは、

「もちろん、こっちの頼みなんだからお小遣いは出すよ？」

「うん、わかった」

ハルが即答した。

「……おい、ハル……」

「だって、おじいちゃんには助けてもらったし、お小遣いくれるならそれ位したっていいじゃない」

「迷子とかにならないかな？」

「だいじょうぶだよー！」なんの根拠もなしに、ハルが断言する。

「まあ、いいか。おじいちゃんには助けてもらったし」

そう言つて、うなづく。

「ねえ……おじいちゃん。これって、ラブレター？」

ハルがとんでもないことをいう。

「さて、どうだろうね？」

おじいちゃんが、くすくす笑う。

「ばか」そういつて、遙をこづく。

「あんまり失礼なこと言なよ」

「だって……」

「それじゃ、おじいちゃん。手紙はこの人に渡せばいいの？」ハルを無視して、おじいちゃんに聞く。

「ああ。なるべくなら手渡しで渡してくれ」

「うん、わかった！」

なくしちゃうといけないう、なるべく早めにわたさないういけないう

かな。

「それじゃ、気をつけてな……」

おじいちゃんの声に背に、ぼくらは部屋を出た。

第三話 出発

いよいよ出発当日。ぼくとハルは、ぼくの家での出発パーティーに呼ばれていた。

「ハル、楽しそうだな」

「だって、やっと旅行に行けるんだよ！」うきうきした声が返ってくる。

「まさかあの宿題が終わるとは思わなかったよな……」

「がんばったもん！」

「解いたのは全部ぼくだし、写したのも半分はぼくだけど」

ぼくのつつこみに、ハルが頬を膨らす。

「いいの！とりあえず終わったんだから！」

「確かに……」

うなずいて、隣の荷物を見る。

「もう、忘れてることないよね？」

「ばっちりだよ」

「ホテルも電車も予約取ってあるし、父さんから旅行の許可書ももらったし、荷物も全部詰めたし。あとはもう出発するだけ！」
相変わらず楽しそうに、ハルが言う。

「たのしみだな、しゅーちゃんと二人で旅行……」

「それにしても、おとーさんたちおそいね……」

足をぶらぶらさせながら、ハルが呟く。

「はやくしないと、ごはんさめちゃうよ」

テーブルの前には、空席が四つ。父さんと母さんと、おじさんとおばさんの席だ。

一時間くらい前に、急におじいちゃんから呼び出しがあって、お父さん達は全員出かけていった。

「なにかあったのかな？」

「会社の人や、おじさんたちも、みんな呼び出されてるみたいなんだけど…」

確かに、ちよつと遅すぎる。

「電話してみる？」といって立ち上がったところで、勝手口のドアが開いた。

「あ、やつと帰ってきた」

「父さん、おかえり…」

いいかけた言葉を、途中で飲み込んだ。

父さんも母さんも、おじさんもおばさんも、今まで見たことがないような顔をしていた。

「…どうしたの？」おそろおそろきいてみる。

「…ああ、なんでもない」すぐわかる嘘を、お父さんがついた。

「…だったらいいけど…」こういうとき、父さん達を問いつめたって無駄だ。

だからぼくはなにもきかず、「はやくごはんにしようよ。電車に間に合わなくなるよ」といった。

すると、父さんは一瞬すまなそうな顔をして、それから、「ふたりとも、今度の旅行は中止だ！」といった。

一瞬、父さん達は何を言っているのかわからなかった。

「どういうこと？」

やつぱりげんそうな声で、ハルが聞いた。

父さんは少し苦い顔になって、

「とにかく、今は旅行に行くな。頼むから」とだけ言った。

「どうして！」

「あとで説明するから。とにかく、行っちゃだめだ」と、父さんはそれだけを繰り返した。

「だって、準備も全部済ませたし、予約も取ってあるし！」

「ひどいよ！せっかくがんばったのに！」

「とにかくだめだ！」

結局、それから何を言っても、旅行に行かせてはもらえなかった。

さんざん泣いて怒って、いやになってベッドに倒れ込む。

明かりを消した部屋で、ぼくは寝返りを打った。

ねむれない。

腹が立ってしょうがない。

横には、すっかり準備の終わった旅荷物。

あれだけがばって、宿題も終わらせて、旅行の手配も全部自分達でやって、さあこれからって時に、いきなり行くななんて！

「ハルはどうしてるかな……」

ぼつりとつぶやいて、向かいの遙の部屋の方を見たとき。

こんこん。

窓をたたく小さな音。

「……ハル？」

窓を開けると、予想通りハルの顔。そして…

赤い大きなポストンバッグ。両側でまとめた髪に、Ｔシャツにスカーフ。

おでかけのかっこうだ。

「どうしたの、そんなかっこうで」

ぼくの質問に、ハルはきっぱりと答えた。

「わたし、行くからね」

「……やっぱり？」ハルの性格からいって、だいたいこうなるとは思っていたけど、それでも聞き返してみる。

「だって、納得できないよ！理由も言わずに、いきなり行くななん

て！」

ハル、おこってる。たぶんこれじゃ、とめたってむだだから……

「そっか」とだけいつて、リュックを担ぐ。

「しゅーちゃん……」ハルが、不思議そうな顔でぼくを見た。

「……行くんだよね？」

「……行ってくれるの？」ちょっと上目遣いに、ハルがぼくを見る。……そういう目で見るの、ずるいと思う。ちよつと目をそらす。

「ぼくだつて、あれじゃ納得できないよ。ハルは言い出したら聞かないし。だいたい、こんな面白そうなことにまぜないつもり？」

「……おこられるよ……」

「ハルだけおこられるの、かわいそうだよ。どうせなら、いっしょにおこられよう？」

そういつて、ハルの手を取る。

ハルはちよつと赤くなって、小さくうなずいた。

「今、おじさん達はぼくの家の方にいるんだよね？」

「うん。なんか難しい顔して話してるみたい」

「じゃ……」

「うん」顔を見合せて、うなずきあう。

屋根を伝つて、ハルの部屋に。

それから、足音を立てないように、そろりそろりと階段を下りていく。

階段の陰から顔だけ出して、おじさん達がいなか確かめる。

「……いいよ。出て」

ハルに合図して、玄関へ。

やっぱり音を立てないように、ゆっくりと鍵を回す。

そつとドアを開け、静かにしめる。

うしろをふりかえりながら歩いて、家から十分離れたところで、ぼくらは立ち止まった。

「うまくいったね！」

嬉しそうなハルの声。

「……だいじょうぶかなあ」不安なのが声に出たらしい。

「しゅーちゃん、考えすぎ！」ハルが笑い飛ばす。

（ハルは考えなさすぎだ……）と思ったことは、もちろん言わない。

「せっかく遊べるんだから、くよくよしてたら損だよ！」

「そうかな」われながら、疑わしそうな声。

「そうだよ！」

断言されてしまった。

「とにかく、あとのこと考えても楽しくないよ。こういうときは、面白いことだけ考えてればいいの！」

「そうだね」

確かにハルの言うとおり。あとのことはあとで考えればいいか。

「じゃ、いこ！」

ハルがぼくの手を握って、楽しそうに走り出す。

なんだか楽しくなって、ぼくも笑い出す。

ぼくたちは笑いながら駅へ向かって走っていった。

第四話 夜行列車

「東碧水」と書かれた看板のすぐ下。

赤い大きなポストンバッグの上に、ハルがちょこんと腰を下ろしている。

「電車、まだかな……」

駅のホームには、ぼくとハル以外誰もいなかった。

「それにしても、どうして父さん達、いきなり『行くな』なんていつたんだろ？」

さつきから、ずっと気になっていたこと。

「父さんもおじさんも、そんなことするひとじゃないよ。少なくとも、ちゃんとした理由があれば説明するし、理由がなければ無茶なことは言わないと思う。一度は旅行を許してくれたしね。なのに、どうして……」

「わかんないよ」

あつさりと、ハルがいう。

「わかんないけど、おとーさん達が無茶いったのは本当だし。そんなに深く考えることないよ」

ハルのいうとおりかもしれない。

今ここでいくら考えたって、ぼくらにわかるわけないんだし。

「それよりさ……」

「東京って、どんなところなんだろ？」

先回りしていつてみる。

たちまちハルがふくれた。

「わたしのせりふとらないでよ」

「ハルのいうことなんかわかるよ。何年一緒にいると思ってるんだ？」

「いつてることわかるからって、そんないじわるするんじゃないよ」

「あ、電車来た！」話をそらせる。
たちまちハルがそつちを向いた。
銀色にオレンジの線の入った電車が、するするとホームに入ってきた。

ドアが開いたら走り出して、切符に書いてある席に座る。
あたりにはもう何人か座っている。

荷物はしっかりと足下に置いて、用意しておいたおやつを取り出す。
「なんだ坊主ら、二人で旅行か？」

前の席のおじさんが、突然振り返って聞いてきた。お酒でも飲んで
いるのか、かなり顔が赤い。

「はい」ちよつと用心しながら答える。

「そうか、えらいなー。どこにいくんだい？」それには気づかない
ようで、おじさんは陽気な声で質問を続ける。

「デイズニーランドに行くの」 やっぱり少し用心しながら、ハル
が答える。

気が付くと、あたりから何人か人が集まってきた。

「兄妹なの？」20歳ぐらいのきれいなお姉さんに聞かれる。

「うっん、いとこ」

「そついえば、名前は？」

「高月遙！」「高月周哉です」

そつ言つと、二人の態度が少し変わった。

「……あの町の高月というと、ひよつとして高月電機とか高月精密
工業とか……」

「おじいちゃんの会社です」

「じゃあ、お金持ちなんだ？」感心したように、お姉さんがいう。

「うっん、お父さん達は跡を継がせてもらえなかったから。そんな
にあるわけじゃ……」

「……でもな。そついうことは、あんまりひとにいうもんじゃない
ぞ」

赤ら顔のおじさんが、とても真剣な顔で言った。

「どうして？」ハルが、不思議そうに尋ねた。

「もしそんなことがわかったら、どんなことがおこるかわからないからさ。自分の身分は隠しておいた方がいい。特に旅先では」

「そうなの？」

「今だって、その名前を聞いたとたんにこっちの態度が変わっただろう？ 知らないトラブルは、避けられるなら避けた方がいいよ」

「うん。わかった」

たぶん、このおじさんの言うとおりだろう。

おじいちゃんの会社に関して言えば、これまでそういったことがなかったわけじゃない。

ハルはあんまり気にしてないみたいだけど。

それから、二人とずっと話をしていた。

おじさんは須崎と、お姉さんは東と名乗った。

須崎さんは東京の会社員で、出張の帰りに電車が無くなったからこの列車に。東さんは東京で大学に行っていて、旅行の時にはいつもこの列車に乗っているそうだ。

二人とも旅慣れているらしく、旅行でのちょっとしたことや東京でいっておいた方がいいところをいろいろと教えてもらえた。

話しこんで気が付くと、時計の針は11時をさしていた。

「もうこんな時間か。それじゃ、おいとましようか」

「あんまり夜更かししないようにね」

そう言って、二人は自分の席に戻っていった。

二人が帰ると、とたんに静かになった。

窓の外からは、かたなかたんとレールの音だけが、規則正しく聞こえてくる。

ときたま知らない駅にとまって、何人かのお客を乗せて。

そしてまた、走り出す。

窓の外、町の灯りが流れては消える。

朝目が覚めれば知らない町だ。

「いてて！」

突然、ハルに耳を引つ張られた。

「なにすんだよ！」

「だってしゅーちゃん窓の外見てばかりでつまんないもん！」

「外の景色ぐらい見たっていいじゃないか！」

「わたしみれないもん！」

「じゃ、かわる？」立ち上がって、遙に席を譲る。

「そうじゃなくって！」

ハルが叫んだ。

「おーい、どうしてそんなおこってるんだよ」

聞いてみても、ハルは顔をそむけたまま。

「…おーい、そんなすねるなよー」

こうなったら、ハルはてこでもうごかないから。

しかたがない。

「なんでもするから。そんな怒るなよ」

とりあえず下手に出てみる。

「じゃ、ゲームしよ！」

「ゲーム？」

「だって私たいくつだもん」

「…だから、怒ってたの？」

そういうと、遙はまたむくれた。

（たしかに、ハルを置き去りにしてたよな…）

ちよつと反省したばくは外を見るのをあきらめて、ハルと遊ぶことにした。

「坊や達、二人で旅行かい？」

いつのまにか、車掌さんが検札に来ていた。

「あ、はい……」

「ちゃんと親御さんの許可は貰ってから来たの？」
体が固くなるのがわかった。

どうしよう。

もしここで、黙って出てきたことがバレたりしたら。

東京どころか、次の駅で連れ戻される。

そう思っ、ハルの方を見る。

「大丈夫です。ちゃんと許可書もあります」

落ち着いた声で、ハルがいう。

「見せてもらえる？」

「はい」ハルが、ボストンバッグの中から許可書を取り出す。

（すごいな……）

そう思ったとき。

ハルが、ぼくの手を握ってきた。

思わず振り払おうとして、気がつく。

（ハル、汗びっしょりだ……）

ここでびくびくして、もし車掌さんに怪しまれたら。

車掌さんがこの電話番号に電話でもしたら、旅行は一卷の終わりだ。

だから、ぼくが少しでも落ち着くように。

ハルが少しでも落ち着くように。

ハルの手を、ぎゅっと握り返す。

「はい結構です」

でも車掌さんは許可書を確認すると、満足そうにほえんだ。
「いい旅を」

とだけいって、車掌さんは去っていった。

「ハル、もう車掌さんいっちゃったよ」

そう言っ、手を離そうとする。でも、できなかった。

ハルがぼくの手をしっかりと握っていたから。

「もうちょっと、このままで……」

「……ん」

ハルがまだちょっとだけ震えているのが、伝わってきたから。

（ハル、がんばってくれたし）

「いまだけだぞー……」

そういつて、手を握り返す。

顔、ちよつと赤い。

なんだかハルの顔がまともに見れなくて、顔をそむける。

そのままなんとなく気まずくなつて、しばらく黙ったままでいた。
でも、さっきと違って、そんないやな気分じゃない。

（……なんだろ？）

考えてもわからないから、そのままにして、ずっとハルの手を握っていた。

しばらくそのままにいるうちに、ぼくの肩にハルがもたれかかってきた。

「ハル、重いよ」

そういつて、体を揺すぶる。

小さな小さな寝息が聞こえた。

「……ねちゃったの？」

「……へんじがない。」

「そういえば、ちよつとねむいかな……」

ぼくもハルにもたれかかる。

「それじゃ、おやすみ……」

あたりから、くすくす笑う声が聞こえる。

どうして笑うのかわからなかったけど、起きられなかった。

ハルの肩にもたれかかって、ハルの手を握ったまま、ぼくはゆっくりと眠りに落ちていった。

第五話 到着

ぼくは、真新しい家のまんまえにたっていた。
これから、ぼくたちが住む家だ。

隣では、おじいちゃんが少し寂しそうに新しい二軒の家を見つめていた。

「おじいちゃん、だいじょうぶ？」

今よりもずっと小さなぼくが、心配そうに声をかける。

「ああ、周坊か……」

しばらくたってから、力無い声でおじいちゃんが返事をした。

「……あの家なくなっただの、やっぱりさみしい？」

ぼくの問いに、おじいちゃんは小さく笑う。

「……いいんだ。あの家が残ってても、ばあちゃんのことを思い出すだけだから。あれとの思い出が詰まった家に住むのは、悲しすぎる」

おじいちゃんの奥さん……おばあちゃんは、半年前になくなってしまった。おじいちゃんはすぐ落ち込んで、しばらくは人と話すこともしなかった。

しばらくして落ち着いたけれど、おじいちゃんはもうすっかりやる気をなくしてしまっただけ。会社の経営を人に任せ、長年住んでいた家を引き払い、その跡地に息子夫婦の家を建てさせて、自分はいくらか離れたところに家を建て、楽隠居することにしたのだ。

けれど、おばあちゃんとの思い出の詰まった家がなくなるのは、やっぱり寂しかったのだらう。せつかくの新築祝いだというのに、おじいちゃんは少し悲しそうに見えた。

そのおじいちゃんの手には、小さな古ぼけた写真があることに、ぼくは気づいた。

なんとなく興味を引かれて、のぞき込む。

写真には、おじいちゃんといっしょに会社を立ち上げた人たちが写

っていた。後ろには、

「高月電気機械工業」と言う木の看板がかかった、粗末な家。おじいちゃんも、伏見さんや他の人たちも、今よりもずうっと若い。何人か知らない人もいるのは、辞めていったのかもしれないし、亡くなったしまったのかもしれない。

おじいちゃんの隣に、若い、きれいな女の人がいることに、ふと気づいた。和服を着て、ほほえんでいる。

……おばあちゃんかな？でも……

そのとき、おじいちゃんがふいに視線をずらせた。つられて、そちら側を見る。

向こうから、お父さんとお母さんが、知らない人たちと一緒にやってきた。

父さん達はぼくの手を引くと、一緒に来ていた人たちを紹介してくれた。

「この人達が、おじさんとおばさん。今日からおとなりさんになるんだ」

優しいそうな男の人と女の人が、こちらに挨拶をする。

「…その子は？」

おばさんの陰に隠れて、顔だけ半分出してじーっとこちらを覗いている女の子。

「ごめんね、この子人見知りするから」

そういつておばさんはその子を前に連れ出した。

「遙、ごあいさつしなさい」

その声に、遙と呼ばれた女の子はおずおずと前に出てきて、

「たかつきはるかです」といって、ぺこんとおじぎをした。

「たかつきしゅうやです」と、こっちも元気よく挨拶をする。

女の子は少しびっくりしたみたいだけど、ぼくが笑いかけると、嬉しそうに笑ってくれた。

「この子、ずいぶん前からきょうだいがほしかったみたいだから。仲良くしてやってくれる？」

「うん！」

ぼくの声に、また遙は嬉しそうに笑った……

「……てよ。起きてよ」

なんだか体がかくかく揺れてる。

「んに……」

「まーだおきないの？じゃあ……」ハルの声に、不気味な感じがして、むーっ、むーっ！

いきなり、息ができなくなった。ハルに鼻をつままれたらしい。

ハルの手を振り払って、起きる。

「おはよ、ねぼすけさん」

「なにすんだよっ！」

「だって、こうでもしないと起きないじゃない。しゅーちゃん、すつごく寝起き悪いし」

「まだ終点じゃないよ……」

「終点までいっちゃったら、誰か待ちかまえてるかもしれないじゃない。今だって、見張られてるみたいだし」

ハルの言葉に、眠気が吹っ飛んだ。

「ど、どこにいるの？」

「三つ後ろの通路側。ほら、あの新聞紙広げてる人」
ちよっとだけ首を動かす。

大きなスポーツ新聞を広げた人が、こっちをじっと見つめている。ぼくの視線に気づくと、その男は新聞の陰に顔を隠した。

「……あやしい……」

「でしょ」

ハルがうなずく。

「で、どうしよう？」

「うーん……」

いい案が浮かばない。

とりあえずあの人を振り切らないといけなけど…

迷っていると、須崎さんが声をかけてきた。

「なんだ、坊主ら。もう降りるのか？」

「はい。ありがとうございます！」

「変な人とかについていけないようにね」

いつのまにかきていた東さんにも、心配そうにいわれる。

「そうだな。最近危ないからなあ」

あいづちをうつ須崎さんをみながら、ハルにこっそりとささやく。

「……ハル。なんとかなるかもしれないよ」

やがて、電車はゆっくりと駅にとまった。

アナウンスとともに、電車のドアが開いて、何人か客が降りていく。ぼくたちはすぐに降りず、ドアのところまで見送りに来てくれた二人と話し込んでいた。

後ろに、さっきの怪しい人が待ちかまえている。

目を合わせないように様子を見ると、時計を見ながらいらいらとぼくたちが降りるのを待っているようだ。

発車のベルが鳴り、ドアが閉まりかけたとき。

ぼくとハルはドアから飛び出した。

あわててあの人が降りようとする……が、二人の荷物に邪魔される。そしてそのままドアは閉まった。

ドアの向こうの悔しそうな顔を見ながら、ぼくたちは顔を見合わせてにんまり笑った。

あのとで、ぼくは二人に事情を話し、あの人が降りるのを邪魔してくれよう頼んだのだ。

ドアの向こうで手を振る二人に「ありがとうございます！」と大きな声でお礼を言ってから、ぼくたちは走り出した。

息を切らして、ちょうどきた山手線に乗り込む。

ドアが閉まり、誰も追ってきてないことを確認して、ぼくたちはほつと息を付いた。

「よかったー……」

「おもしろかったね！」

すごく嬉しそうに、ハルが笑う。

なにを気楽な、と思ったけど、

「……うん。ちょっと、おもしろかった」

なんか、ハルがうつつてきてるかもしれない。

「まず、どこにいこう？」まだ少し荒い息で、ハルにきかれた。

「うーん……まだ、お店やさんはあいてないよね……」

「だったら、わたし少し行ってみたいところがあるんだけど」

新宿で電車を降りる。

朝のこんな時間なのに、もう新宿は人でいっぱいだった。

電車に乗る人、降りる人。

ぼくらの町なら、こんな時間に起きているのは新聞配達か市場の人ぐらいだ。

人波に逆らって、西へと歩く。

どうやら、夜も明けたみたいだ。

東京でも、やっぱり朝は涼しいらしい。

やがて人もとぎれたころ、ぼくたちは目的の建物の前にいた。

「うわあ……」

東京都庁に、あたりのビル。

ぼくらの町では見られない、最初のもの。

ちょうど昇ってきた朝日に照らされたそれは、どこまでも高くて。

「やっぱり、きてよかったな……」

ぼつりとハルが呟く。

「あとどれくらい、むこうでは見られないものがあるんだろうね……」

ぼくたちは、首が痛くなるまで、ずっと飽きずにこれから歩く町のビルを見上げていた。

第六話 事件と事件

ぼくたちは、東京を満喫していた。

初めてみる大都会。テレビに出ていた町。どれくらいいるのかわからないほどの人たち。

駅前にいるパフォーマー、見たこともない珍しい店。見るものすべてが珍しかった。

午後一時。

ぼくたちは竹下通りの中にあるハンバーガーショップで、これからの計画を立てていた。

「つぎは、あそこで服買ってあのお店に行つて……」

「まだいくのかよ……」うんざりした顔のぼくに、

「いいでしょ、せっかく来たんだから」ハルが口をとがらせる。

「荷物を持つのがぼくじゃなければ」できるだけ嫌そうな声で、いつてやる。

実際、さっきまではすごい荷物を抱えていた。

かわいい服だのぬいぐるみだの見つけるたびに買おうとするのはいいとして、それを全部ぼくが持たされるから、重くつてしょうがない。

さっき嫌がるハルを説得して宅急便で送らなきゃ、どうなったことやら。

「それよりさ」

ハルがしゃべろうとするのを止めて、話を切り出す。

「ちよつとよそへいった方がいいかもしれない」

「どうして？」ちよつと頬を膨らせて、ハルが言う。

「来る前の予定表だと、だいたいこの時間にこの町に来ることになつてゐるんだ。そこで見張られてたら、またつかまっちゃうよ？」

「だいじょうぶだよ。追っ手の人はまいちゃったんだし」

「だからこそ、逆にそこで見張ってるかもしれないじゃない。手がかりはそれだけしかないんだし」

「しゅーちゃん、心配しすぎ！」

「ハルが心配しなさすぎなんだよ！」

「だってそれじゃ、ちつともおもしろくないもん」

「おもしろいとかじゃなくてさ。捕まっちゃったら、もう遊べないんだよ？」

「い・や！」頑固にハルは首を振る。

いい出したら聞かないのはわかってるけど、こんな時ぐらい素直に聞いてくれたっていいのに！

「嫌なのはこっちだぞ。ハルと一緒に捕まりたくないし」

「しゅーちゃんこそ、びくびくしすぎ！そんなんじゃ、ばれないものもばれるよ！」

「ハルは考えなさすぎだ！もうちよつと注意したらどうなんだ！」

だんだんと、声が荒くなっていくのがわかる。

「だったら、わたしだけでいくもん！」

「かってにしる！」

もう我慢できない。トレーをひつつかんで、出口へと歩き出す。

店を出て、ぼくは駅へと歩き出した。ハルはそれを見て、顔を背けて反対側へとあるき出す。

一度振り返って、ハルと目があつて。

「ふん！」

またお互いに顔を背けた。

足音が、いつもよりずっと大きい。

そこにハルがいるかのように、道路を踏みつけながら歩く。

ハルのほか。

ハルのあほ。

あんなわからずや、どうなったって知るもんか。
だいたいあんなわがままなやつ、一緒にいるだけで疲れるよ。
いなくなつてせいせいした。

ハルのことなんか忘れて、一人でのびのび遊ぼう。
うん、それがいい。

自分に言い聞かせるように、頭のなかで繰り返す。

ふと立ち止まって、辺りを見回す。

知らない町。

知らない人たち。

あいかわらずの、見たことのない風景。

でも、ときどきしない。おもしろくない。

ただ不安になって、いらいらするだけ。

こんな知らないところに、一人でほうりだされて。

あたりには頼れる人は誰もいなくて。

(……ハル、どうしてるかな)

気が付けば、そんなことを考えている。

(いいや。あんな奴の事なんて、もうどうだっていいじゃないか)
そう思つて、その考えを振り払う。

けれど気が付くと、またハルの歩いていった方向を見ている。

(ハル、迷子になってないかな)

(だいじょうぶかなあ)

(あいつ、おつちよこちよいだからなあ。泣いてなきやいいけど)

そして思い出す。

ハルが、ここに行こうと誘ってくれたこと。

ハルとだから、行こうと思ったこと。

ハルと一緒にだから、ここまでの無茶ができたこと。

やっぱり、ハルと一緒にじゃなきゃだめだ。
もと来たほうにきびすをかえす。

ハルに会おう。会って、あやまって、また一緒に歩こう。
そう思っ、足を踏み出したとき……

携帯が鳴り響いた。

番号を見る。ハルからだ。

急いで電話を取る。

「ハル、さっきは……」ごめん、といいかけたところで、

「しゅーちゃん、助けて！」

ハルが叫ぶのが聞こえた。

「どうした？ 迷子にでもなったの？」

「ちがうよ！」

真剣な声。本当に、助けてほしいときの声。ふざけているようには
聞こえない。

「どうしたの？」

「なんか、変な人に追っかけられて……」

「変な人？」

「うん。なんかすごく怖そうな人たちが……」

ハルの息が荒い。たぶん、追っかけられて逃げている最中なんだろう。

「今どこにいるか、わかる？」

「さっき通ったビルがあるじゃない。あのビルから奥に入って少し
いったところ！」

「わかった！」

電話を切って、走り出す。

だから言ったじゃないか、追っ手がいるから危ないって！

でも、電話の向こうのハルにそれを言う気にはなれなかった。

まずはあいつを見つけて、助けてやらないと。

「ハルが一緒じゃないと、つまんないからな」

言い訳するように独り言を言う。

人ごみをかき分けて、ハルのいる方向へ。

なんだか少しほっとした感じがするのは、たぶん気のせいだろう。

ハルは、しばらくして見つかった。

住宅街の間の、小さな裏路地。にぎやかな町から一步入っただけなのに、どこにも人の気配がしない。

そのの、小さな植え込みの陰。

ハルが、何人かの男に囲まれていた。

髪を金に染めた男、赤に染めた男。それだけなら原宿には珍しくもないけど、彼らの雰囲気は、それとは全く違っていた。

(怖い……)

近寄るだけで、体がすくんでしまいそうな雰囲気。

「しゅーちゃん！」

ハルの叫び声で、向こうも気づいたらしい。

ぼくの方に、目を向ける。

その目を見たたん、背筋が寒くなった。

違う。

こいつらは追っ手じゃない。

もっと嫌な感じがする。

けれど、ここで逃げるわけにはいかない。

ハルを助けないと。

三人の様子をみる。一番右の男をなんとかすれば、とりあえずハルは逃げられるだろう。

そう計算して、右の男に突っ込んでいく。

「ハルをいじめるなっ！」

そのとき、ハルを取り囲んでいた男達が、にやりとわらった。まるで、獲物をとらえたときのような、嫌な笑いだ。

……そういえば、どうしてハルは最後まで無事に電話ができたんだ？

こんな状況なら、ハルなんか簡単に捕まえられるはずなのに。

どうして、ぼくがここにたどり着くまで、携帯で話ができただ？ あんなもの、すぐに取り上げてしまえるのに？

ぼくが来るまではおっておいたのは……

ぼくを、おびき寄せた？

「しまっ……」

気づいたときには、遅かった。

首筋に衝撃が走った。

目の前が真っ暗になる。

ぼくが覚えているのは、そこまでだった。

第七話 誘拐

ひんやりとしたコンクリートの床の感触で目が覚めた。

天井がずいぶんと高い。真夏の日差しも、ここまでは届かないようだ。

（冷たい？）

今は真夏なのに？

なんだ？

どうなっただ？

あの時、変な奴らに襲われて……

あわてて体を起こそうとして、失敗する。

（なんだ、これ？）

手が動かない。

何かで、縛られてる？

なんとかはずそうと、手首を前後に振り、ちからいっぱい引っ張ってみる。

けれど、よほどがっちり縛ってあったらしくて、手首がこすれるばかりでちぎれない。

何度もやるうち、手首が痛くなってきた。

たぶんこすれて、血が出てるんだ。

結局ほどくのをあきらめたばくは、いまの状況を思い出してみた。

（そうか、さっきの……）

（……）

（ハルは？）

ぼんやりしていた頭が、一瞬で冴えた。
あたりを見回す。

と、僕の後ろで、

「うっん……」と、小さな声。

「ハル、大丈夫？」

「しゅーちゃん？」

ぼんやりとしていた目に、少しずつ光が戻ってくる。

「よかった。とりあえず、無事……」

「しゅーちゃんっ！」

ハルが飛び上がって……くずれた。

手が縛ってあるから、うまく起きあがれなかったんだ。

「だ、だいじょうぶ？」

あわてて声をかける。

なんとかおきあがると、ハルはいきなりぼくに飛びついてきた。

「ハル？」

「よかった……無事だったんだ……」

それだけを、何度も何度も繰り返す。

「心配したんだよ、しゅーちゃん……」

泣き続けるハルを、なぐさめてやりたかった。

けれど、手は縛られていて、いつもみたいに背中をなでてやることもできない。

だから、肩を貸した。

ハルの目の前に、肩を突き出す。

ハルはおとなしく、ぼくの肩に顔を預けて、なきじゃくった。

肩は冷たかったけど、伝わってくるハルの暖かさが、いまは誇らしかった。

しばらくして遙が落ち着くと、ぼくたちはあらためてあたりを見回した。

「どこなんだろう、ここ……」

「なんかの倉庫みたいだね」

いくつもの棚が並んでいて、その間の床に、ぼくたちはころがされていた。

あたりには、荷物がうずたかく積まれている。

「今でも使ってるのかな、この倉庫」

「かもしれないね。クーラーも利いてるみたいだし。もしクーラーがなかったら、暑くていられないはずだよ」

真夏の光も、ここまでは届かない。窓のない倉庫の隅っこは、この時間でも薄暗くて。向こう側に何か得体の知れないものがいそうなそんな感じがして、ぼくは身震いした。

ふと、ハルの手元を見る。

縛られた両手。ぼくと同じでなんとかはずそうとしたんだろう、手首に真つ赤なあざができています。

縛っているのは、ビニールのひもだ。それで、何重にもぐるぐる巻きにされている。

力づくでは、はずせそうもない。

「これは、どうにもできないね」

ぼくの言葉に、ハルもうなずく。

「これ、追っ手の人たちじゃないよね」ハルが、ぼつりと言った。

「そうだろうね」

追っ手の人たちだったら、そもそもぼくたちを殴ったり、気を失わせたり、こんなところに閉じこめたりするはずがない。

「そうすると……」

さつきから、考えていたこと。もし口に出したらそれが本当のことになってしまいそうで、怖くて口に出せなかったこと。

「誘拐……？」

その言葉に、ハルが身をすくませる。

「そんな……」

「でも、他に考えられないよ。じゃなきゃ、どうして縛られてこん

なところに転がされてるのさ」

そのとき、外で足音が聞こえた。
びくつと体が震える。

乱暴にドアを開けてあらわれたのは、さっきの男達だ。

「やつとお目覚めか」縛られたばくたちを見て、にやにや笑っている。

ハルが、体をすくめる。

男達が出せないように、なんとかからだを動かして、ハルの前に動いていく。

「へえ……」

それに気づいて、金髪の男がさらに笑う。

「ナイトのつもりだぜ。ガキのくせしてよ」

「いったい、どうして……」男の言葉を無視して、聞いてみる。

「はっ」赤い髪の男が、馬鹿にしたように呟く。

「ずいぶん頭の悪いガキだな。誘拐されたに決まってるだろうが」

誘拐……

一番信じたくなかった言葉。

「どうして、こんな……」

「どうしてか？そりゃ、目の前にこんな獲物がこのこ歩いてたら、捕まえるに決まってるじゃねえか」

鼻ピアスの男がせせら笑った。

「ここはどこ？」

ばくの質問に、彼らは歯をむき出して笑う。たぶん、まともに答える気はないらしい。

いや、そもそも質問に答える気もないのかもしれない。ただ僕らを痛めつけて、笑うただけに来たんだろう。

「おうちにかえしてよ！」

ハルが叫ぶ。

「家出中じゃなかったのか？」

男の言葉に、ハルはぐつと詰まった。

これは、他のことを聞いても笑われるだけで終わりそうだな。だから、一番大事なことだけ聞いてみた。

「これから、どうなるの？」

一番、聞いたかったこと。

「おまえらが、親に愛されてるかどうかな
いやな言い方だ。」

「おまえらの親が金を払ってくれたら、きちんと解放してやる。それは心配するな」

リーダーらしい鼻にピアスをした男が言う。

「もし、お金を払ってもらえなかったら……」

おそろおそろ、たずねる。

「そうだな、そのときは……」

男が、ナイフを取り出して、

「きゃーっ！」

ハルの悲鳴が聞こえた。

男のナイフは、ハルの目の前一センチぐらいのところで、止められていた。

「何すんだ！」

自分の声が裏返っているのがわかる。

ハルはぎゅつと目をつぶって、ぶるぶると震えている。

それを見て、男は満足そうに笑った。

「生きて返せば、耳や指のひとつぐらいなくなっても、特に困ることはないからな」

そういつて、ゆっくりとナイフをしまう。

「もちろん、要求通り金を払わなかったときは……」

そう言つて、首をかつ切るまねをして、男はまた笑つた。ぼくたちを痛めつけるための、笑いだった。

けれど、ぼくはそんなことはどうでも良かった。

後ろで震えるハルが心配で。

震えているハルに、少しでも体をくつつけて。

少しでもハルのふるえが収まるように、それだけを考えていた。

男達は、僕らの様子を見て満足したらしい。

「逃げようなんて気を起こすんじゃないぞ」

それだけ言つと、男達は去っていった。

ドアの閉まる音が、大きく、大きく響いた。

第八話 やくそく

あいつらが出ていってからも、遙はずっと震え続けている。
ぶるぶると震えているハルを安心させるために、できるだけ体をく
つつける。

ぼくはここにいろよと、ハルに伝えたくて。

ぼくの肩に顔を埋めて、ハルが泣いている。

「しゅーちゃん……怖かった！怖かったよ……」

こんなに怖がつてるハルを見るのは、はじめてだ。

なんとかしてあげたい。

でも、いまのぼくには、泣いてるハルを慰めてやることもできな
い。

「大丈夫だよ」といって、背中をなでてやることもできない。

いまこの手が動くなら。泣いてるハルを慰めてやれるなら。

ぼくはなんだってするのにな。

「だいじょうぶだよ。泣くなよ、ハル……」

それだけを、繰り返し言い続ける。

そんなんじやハルが泣きやまないことぐらい、わかっているのに。

でも、いまのぼくにできることは、これだけだから。

だから、なぐさめながら、そばにいる。

あいつら。ハルをこんな目に遭わせて。

絶対、許さない。

絶対に。

けれど……

あいつら、どうして僕らを誘拐したんだ？

そうして、ぼくは考えて。

気が付いた。

気が付きたくなかったことに。

体が震える。

今、震えちゃだめだ。

ハルが震えてるのに、ぼくまで不安になったら。

けれど、ふるえは止まらない。

いまとなりにいるハルに、たすけてもらいたい。

寒気がする。いまは夏で、ここはこんなに暑いのに。

「しゅーちゃん、どうしたの？」

とうとう、ハルに気づかれた。

「なんでもないよ」

「うそ！しゅーちゃん、真っ青だよ！」

「ほんとに、なんでもないって！」

気づかれちゃだめだ。

いまのハルに、こんな事を教えたら。

ハルが、壊れちゃう。

「……しゅーちゃんも、なんにもいつてくれないの？」

なんにも知らないハルが、泣きながら言う。

「おとーさんやおじさんたちみたいに、なんにもいわずにわたしだけのけものにするの？」

言えない。それでも、言えない。

父さんたちが、なんでぼくたちを止めたのかはわからないけれど。言えない理由は、よくわかる。

でも……

（このまま話さなくても、ハルは壊れちゃうんじゃないか？）

（こんな事を隠していることがわかったら、もう二度とハルは口を利いてくれなくなるんじゃないか？）

目の前のハルは、すっかり元気をなくしてる。

こんなの、ハルじゃない。

言っても言わなくても、ハルが泣くのなら。

ぼくたちがどんなことになっているのか知ってから泣く方が、まだいいはずだ。

いつものハルなら、そう思うはず。

「しゅーちゃん？」

ようすが変わったのが、わかったらしい。ハルが、すこし不思議そうな声を出した。

「ハル……落ち着いて、よく聞いて」

まだしゃくりあげながら、ハルがうなずく。

「なあ、ハル。ぼくたちが東京に行くこと、誰かに言った？」　さつきから、ずっと気になっていたこと。

「ううん。行けるかどうかわからなかったし、夏休みだからあんまり友達に会わないし」

「だよ。ね。ぼくも、言ってない」

「それがどうかしたの？」　不思議そうなハルに、説明する。

「ハルも言ってない。ぼくも言ってない。じゃ、いったいどうして、あいつらはぼくたちがここにいることを知ってたの？」

また、震えが来た。

「僕らを誘拐しようとするなら、絶対にぼくらの町でするはずだよ。というより、他の場所で誘拐なんてできるわけがないよ。

それなのに、あいつらはわざわざ東京で僕らを誘拐した。しかも、予定表の通りの場所だね。

とすると……あいつらはぼくたちが東京に来ることも、この時間に原宿にすることも、全部知ってたことになる」

「だれか、わたしたちの予定を知ってるひとが、あいつらにその予定を教えたってこと？」

「いや……教えたんじゃない。ぼくたちの旅行の予定なんか聞いたら、疑われるに決まってる。普通、なんの関係もない人にそんなこと教えないよ。」

あいつらの様子を見る限り、親戚の誰かと仲がいいって言うこともなさそうだ。とすると、

……ぼくたちの予定を知っている人が、あいつらと手を組んだんだ。そして、予定を教えて、誘拐をさせる「いやだ。そんなこといやだ。信じたくない。でも……」

「誰か、裏切り者がいるんだ。それも、予定を手に入れることができる、ぼくたちに近い人が。ぼくたちを誘拐して、こんな目にあわせた誰かが」

話し終わると、倉庫の中は静かになった。

とても、静かになった。

ハルは黙ったまま、なにも言わない。

さつきよりも、もっと元気をなくしたのが、わかる。

言わなきゃよかった。

たとえハルに恨まれても、ずっとじぶんだけの秘密にしておけばよかった。

でも……

それは、できない。

それじゃ、お父さん達と一緒になっちゃう。

ぼくたちが知らないところで、勝手に物事が進んでくのなんか、ぜったいいやだ。

だから、それはいい。

それよりも、ハルをなぐさめたい。
なんとか、ハルに元気になってほしい。
いつものハルの顔が見たい。

「ハル」

しおれているハルに、背中越しに声をかける。

「どんなことがあっても、ハルは逃がすから。何かあったら、ハルだけでも逃げて」

ハルを元気づけるつもりで言った言葉だったけど、ハルは首を横に振った。強く、強く。

「やだ！」大きな声で、ハルは叫んだ。

「ハル？」

「しゅーちゃんといっしょじゃなきゃ、やだ！」

ハルは、目に涙をいっばいたためて、ぼくをにらんでいる。

本当に怒ったとき、ハルがいつもする顔。

「だってさ、もし私だけ逃げたとしたら、わたし、しゅーちゃん見捨てたことになっちゃうんだよ？そんなのやだよ。わたし、しゅーちゃんといっしょじゃなきゃ、絶対逃げないからね！」

わすれてた。ハルはこういうやつだった。

「逃げるときは一緒だよ」

「…ごめん、ハル」

「あやまんなくてもいいから、やくそくしてよ。絶対に、二人で逃げるって」

「やくそくする。やくそくするよ、ハル」

そういうと、ハルの顔がちょっとだけ明るくなった。

「じゃ、ゆびきり」

「ゆびきり？」

「約束なんですよ？」

そういつて、ハルの小指が伸びてきた。

背中合わせに、縛られたハルの小指になんとか指を絡める。

ゆびきりをして、小指を離す。

「うそついたら針千本だよ？」

そう言ったハルの顔に、さっきまでの、消えてしまいそうな感じはなかった。

いつもの、元気でいてんばで無鉄砲で考えなしのハルだった。

「ハル……」

「ん？」

「いつしよだよ。どんなときでも」

絶対、逃げてやる。

あんな奴らに、一円だつてやるもんか。

ハルと二人で、絶対逃げる。

そのために、今はゆっくり休んでおこう。

いざというとき、ハルと一緒に逃げられるように。

……ハルとこれから、一緒にいられるように。

第九話 空が飛べないのなら

「……だめだー」

何度目かの挑戦で、ぼくは床にひっくり返った。となりには、やっぱりひっくり返ったハルの顔。

あれから、なんとか動く指先で、ハルの縄を解こうとしたけれど。大人の力できつく縛られた縄は、びくともしなかった。

「指じゃ無理だよ、これ……」

ハルの声に、ぼくもうなずく。

「なにか刃物がないと、どうにもできないよ」

刃物といつても、あたりは段ボール箱ばかりで、それらしいものなんか見つからない。

「しばらく待つしかないか……」

そういつて、あおむけになる。

うんと上の方に、高い天井。

明かり取りの窓は、ハルとぼくを合わせたよりも、ずっと遠くて。たとえ縄が解けたとしても、あそこまでは登れない。

（ほんとだったら）

いまごろはあの窓の外で、まだ楽しく遊んでたはずなのに。

じっさいは、ぼくらはこんな倉庫の片隅で縛られて転がされて。いつ出られるかも、どうなってしまうかもわからない。

もしも空が飛べたなら。あの窓から出ることができたら。

なんだか、すこし涙が出てきた。

なんとかこらえて、ハルの方を見る。

いまのが気づかれてなかったか、ちょっと心配だったから。

けれど、となりのハルのようすは、なんだかおかしかった。

息が荒い。少し顔が赤くなってる。

熱を出しかけの時、ハルはいつもこんな感じになる。

「ハル、だいじょうぶ？」あわてて聞いてみる。

「うん。ちよつとのどがかわいて……」少し苦しそうな声で、ハルが答える。

そういえば、さっきお店でジュースを飲んでから、ずっと何も飲んでない。

あんなに暑い中を走り回ったのに。

（もつと早く気づいてやれば良かったかな）

「あいつらに、お水持ってきてくれるようにたのんでみるよ」

そう言うぼくの手を、ハルがつかんだ。

「いやだよ、こわいから」

さっきのことを思い出したんだろう。ハルの体がまた震えてる。

「……でもさ。僕らがお水を飲みに行けるわけじゃないじゃない。ちよつとお水を持ってきてもらうだけなら、なにもされないよ、たぶんそれにさ、逃げ出すとき、体調が悪かったら、すぐに捕まっちゃうよ。いまはゆっくり休んで、チャンスを待った方がいい」

ぼくの言葉に、ハルは小さく、こつくりとうなずいた。

ハルにはああいったけれど、やっぱり怖い。さっきのことが頭いっぱいになる。

それでも、なんとか呼びかけてみる。

「すいません」

ドアの向こうからは、なにも返事がない。

「すいませーん！」

ちよつと大きな声で叫ぶ。それでも、返事はない。

「すいませーん!!」

思いつきり大きな声で叫び、どたどたと足を踏みならす。やっぱり、返事は返ってこない。

それでも何度か大声を上げていると、やがて足音が下から聞こえてきた。どうやら、階段を上ってきたみたいだ。

足音はドアの前で止まり、

「うるせえな……」

金髪の男が、不機嫌そうな顔で現れた。

「なんだよ」

思い切りにらまれて、体がすくむ。

「お水が飲みたいんですけど。ハルの具合が悪いみたいだし」

「そんなことでいちいち呼ぶなよ」うんざりしたような感じで言い捨てて、男はそのまま帰ろうとした。

「けど、ぼくたちは手も足も縛られてるからお水を飲みに行けないし。それにもしハルが病気になったりしたら、そっちもいろいろしなきゃいけないでしょ？」

ぼくの言葉に、男は立ち止まって、物凄く不機嫌そうな顔をした。

「よけいなことを言うな」

しまった。ちょっとまずい言い方だったかもしれない。

けれど、男はそこでじっと考えている。ぼくの言葉は男を動かしたらしい。

やがて、「……ちょっと待ってろ」というと、男は外へと出ていった。

少しして、男が水の入ったガラスのコップを二つもって戻ってきた。

「感謝しろよ、わざわざ持ってきてやったんだから」

いかにも良いことをしてやったと言いたそうな男に、とりあえずお礼を言う。

「ありがとうございます」

まず、男がハルに水を飲ませる。

ハルはのどを鳴らして水を飲んでいく。

飲んでいくうちに、ハルがすこしづつ具合が良くなっていくのかわかる。

飲み終わったときには、さっきよりもうんと元気になったハルが、ぼくの方を見て笑った。少しほっとした。

次は、ぼくの番。

男が、水をぼくの口に流し込む。でも、

（……速い！）

水を流し込むのが早すぎる。

我慢できなくなつて、むせてしまった。

はずみでコップが床に落ち、割れて飛び散る。

「なにしゃがる！」

男がいきなりぼくの頭を叩いた。

頭がくらくらして、何も考えられなくなる。

「なにをするの！」

ハルが男をにらみつける。

けれど男はハルの方なんか見向きもせず、汚れてしまった自分の服のことばかり気にしている。

男はあわてて飛び出していき、しばらくしてからちりととぼつきを持って、戻ってきた。

ぶつぶついいながら、割れたコップを片づけていく。

倒れているぼくと、男をにらんでいるハルには、見向きもしない。

たぶん本当に、気にしてなんかいない。

ぼくらに何かできるなんて、考えてもいないから。

だから、簡単に水を持ってきてくれたし、この部屋にいてぼくたちを見張ってもいなかった。

彼らにとつて、ぼくらはなににもできない、彼らの気分次第でどうとでもできるただの子供でしかない。

なぐられたことよりも、そのことのほうが悔しかった。

片づけが終わると、まだぶつぶつ言いながら、男はさっさと帰っていった。

男がいなくなると、すぐにハルが飛びついてきた。

「だいじょうぶ？」

倒れ込んだぼくを、ハルが心配そうに見つめる。

正直、すごく痛い。けれどハルを安心させるために、なんとか笑顔を作る。

「だいじょうぶだつて。それより、いまは考えることの方が大切だよ。いまので、いろいろとわかったし」

そう言つて、なるべく自信ありげな顔を作る。

「わかつたつて……なにが？」

きょんとしたハルに、ぼくはゆっくりと説明をはじめた。

「まず、あれだけ大きな声を出して叫ばないと、向こうには聞こえないつて事。つまりこの部屋には見張りがいなくて、どこか離れたところにあいつらがいること。」

それから、ここでどんなことを話しても、あいつらまでは届かない。だから、あいつらに聞かれずに、いろんな事が相談できること。もうひとつ、あいつが来るとき、下の方からだんだん音が大きくなってきたでしょ？ たぶんここは上の階にあつて、あいつらはそのすぐ下の階にいること。いちおう暴れたら聞こえたんだから、何階も離れてるわけがないからね」

話していくうちに、ハルの目がどんどん大きくなっていく。
そうとうびっくりしてるな。

ちよっと気分がいい。

けれど、こんなもんじゃないよ、ハル。

空が飛べないのを泣いてても、しょうがないから。

空が飛べないのなら、飛べるようにすればいいんだ。

「それから、さいごにね……」

おもいつきり気を持たせるように間を空けて、縛られた手の下を見せる。

つられてのぞき込んだハルの目がまんまるになった。

手の下には、さっきのコップのちっちゃな破片が転がっていた。

第十話 反撃

そつとドアを開ける。

あいつらに気づかれないうちに注意しながら、ちよつとだけ顔を覗かせる。

その下に、もう一つ。ハルの小さな頭。

「だいじょうぶ？」

「うん。だれもないみたいだよ」

その声で、ハルが小さく息をつく。

ドアの前には廊下があつて、卒業式の時体育館に敷くような緑色のシートが、階段まで続いている。

「どこにいるんだろ、あいつら……」

「しゅーちゃん、あそこ」

ハルが指さした先。目の前の、手すりの付いた広い階段の下に、何人かの男達が集まっていた。

あいつらを何とかしないと、とても逃げ出せそうにない。

さらにその向こうにも、下への階段が延びているから、ここはどうやら三階より上らしい。

「……窓とかから逃げるわけにも行かないか」

だいたい、あんな窓に登るだけでも大変だ。

やつぱり、あいつらをどうにかしなきゃいけないらしい。

それが終わると、ぼくたちは改めてこの倉庫の中を見回した。あたりをずらつと埋め尽くす、段ボールの箱の山。

適当に一つ開けてみる。

「こりゃいいや。ちようどいい武器になる」

紙のパイプだ。組み合わせて棚なんか作ったりするやつ。

二本取り出して、ハルに一つ渡す。

けど受け取ったハルは、なんとなく不満そうだ。

「こんなんじゃ、やつつけられないよ。もつとじょうぶなのない？」

「……死んじやったらどうするんだよ」

あきれて、ハルを見る。

「何とか、あいつらをやつつける方法、ないかなー」僕のようにすは
気にもしないで、ハルがつぶやいた。

「別にやつつけなくても、あいつらがいなくなって、ぼくらが逃げ
出せばいいんだよ？」

なんだか忘れてるような気がしたから、言ってみる。

「やだ、そんなの！だってあいつら、しゅーちゃん殴ったんだよ？
仕返しぐらいしなくちゃ！」

ハルの声は小さかったけど、すごく厳しい声だった。

こういうとき、ハルに何を言っても無駄だ。

それに、確かに逃げるだけじゃ腹の虫がおさまらない。
さっき思ったじゃないか、絶対許さないって。

なんとか、あいつらをやつつける方法は……

「鉄パイプか何か、ない？」

考えている僕に、ハルがいきなりそんなことを言った。

「……そんなので殴ったら、あいつら死んじゃうよ」

「べつに死んでもいいけど、しゅーちゃんも捕まっちゃうでしょ？
そうじゃなくてね……」

いたずらっぽくハルが笑う。この旅行のことを言いだしたときと、
同じ笑い方。

何か、とんでもないことを思いついた顔だ。

「なんか思いついたら、ハル」

「あのね……」

耳元で、ひそひそ話された、その計画は。

たぶん、僕がいくら考えても思いつかない、すごい計画だった。

「……いいね、それ！いただき！」

思わず、ハルを抱きしめる。

「すごいよ、ハル！」

「さっきから、しゅーちゃんばかりがんばっててさ。わたしだつて、このくらいのことできるもん」

ちよつと赤い顔で、ハルが言った。

ハルの計画がうまくいくように、部屋の中を探す。

鉄パイプはなかったけど、大きな台車が見つかった。

たぶんこれで荷物を運ぶんだ。

動かしたらすごい音がしたから、それぞれ持って運んだ。

あいつらに見つからないように慎重に動いて、5分くらいで準備ができた。

「これで、十分かな」

僕の声に、楽しそうな顔で、ハルが言う。

「反撃開始だね」

「いつまでもやられっぱなしじゃないよ」

お互いに顔を見合わせて、にやつと笑う。

正直、怖いのはあるけれど。

この顔のハルがとなりにいれば、どんなことだってできるような気がする。

ハルがどう思ってるかは知らないけれど。

はじめる前に、もう一度だけハルの顔を見る。

ハルはちよつと不思議そうな顔をして、それからまた楽しそうに笑った。

わざと大きな音をさせるように、台車を階段の前に運んでいく。階段の下のあいづらが上を向き、ぼくらの姿を見て、一瞬だけ信じられないような顔をした。

一瞬だけだった。

すぐに、ものすごい顔になって、階段を駆け上がってくる。

階段の前の見張りは、誰もいなくなつた。

あいづらが一番上まで、二、三段まで来た、そのとき。

一度だけ、ハルと顔を見合わせて。

「1、2の、3！」

一気に、目の前のシートを引き上げた。

シートが、階段の下まで、まっすぐにのびる。

上にあつたものを、何もかもはねとばして。

金髪の男が、空中を駆け上がるのを、ぼくは確かに見た。

そしてその格好のまま、空中をまっさかさまに転げ落ちていく。

ほかの男達が、その上にどんどんと積み重なっていく。

階段の下は、あつという間に倒れた人でいっぱいになった。

そこに、さつき持ってきたダンボール箱を台車ごとぶちまける。

さつき、鉄パイプを使おうとハルが言っていたのは、これだった。

重すぎる段ボールを、早くぶちまけるため、てこにするつもりだったんだ。

中身の紙管が、ものすごい勢いで転がっていき、倒れた男達を埋めた。

「……死んでないよね？」

「……だいいけど……」

ハルと、顔を見合わせる。

階段の下では、物音一つしない。

紙管の間から、ちょこちょこ顔や足がはみ出している。

けど、すぐにハルが手すりに飛び乗った。

そのまますべりおり、飛び降りる。

ハルの足の下には、さっき埋まった真っ赤な髪の男。

かえるがつぶれたような声を上げて、男は気を失った。

「だいじょうぶみたいだよ、しゅーちゃん！」

「……いや、だいじょうぶじゃないだろ……」

……これからは、絶対にハルを怒らせないようにしよう。

ぼくもすぐに滑り降りる。

ハルのまねをして、途中でうめいていた金髪の男を、思いっきり蹴り飛ばしておいてから、入り口の向こうのハルについて走り出した。

「急いで！」ハルの声について、階段を駆け下り、入り口を一気に目指す。

一階の入り口はもうすぐだ。

けど……

「！」

声にならない悲鳴を上げて、ハルが立ち止まる。

入り口の前には、まだ何人かがいて、ぼくたちを待ちかまえていた。

「あいつらだけじゃ、なかったんだ……」

声が震えるのがわかる。

後ろからも、さっきつぶれた男達がやってきた。

前の男達はやにや笑いながら、後ろの男達は今にもつかみかかりそうな顔で、こっちに迫ってくる。

「ハル、後ろ頼む」

「うん」

背中を合わせて、持っていた紙管を構える。

背中の方こうに、ハルがいるのがわかる。
怖いのが、少しどこかにいった。

「絶対、逃げるからね」

ハルにだけ聞こえるように、小さくつぶやいて。

背中ごしに、ハルが少しでも安心したのを確認して。
ぼくは、男達をにらみつけた。

第十一話 救援

そのとき、入り口のドアが開いた。

男達がいつせいにそちらを見る。

入ってきたのは、30歳くらいの落ち着いた感じの男の人だった。

彼を見て、男達の顔が一瞬ゆるむ。

「やあ、こりゃ……」

笑って言いかけた男の一人に、彼はいきなり猛烈なパンチを浴びせる。

「！」

あわてて男達が彼を取り押さえようとしたけれど、彼の方が早かった。

二分もしないうちに、あいつらは全員床に転がっていた。

あつと言う間にあいつらを片づけると、男はぼくたちの方に近づいてきた。

身構えるぼくたちの前で、男はにっこり笑って、

「お待ちせしました、周哉様に遙様。平沢と申します。高月の家の方から助けに参りました」

といって、頭を下げた。

あわててこつちも頭を下げる。

「助けに来てくれたの？」

嬉しそうな顔をするハル。

「ええ。遅くなって申し訳ありませんでした」

そう言つて、すまなさそうに頭を下げる平沢さん。

「とんでもない！……ハルを助けてくれて、ありがとうございます」

……正直に言つと、ちょっとだけおもしろくなかった。

自分たちだけで逃げ出すことができなかったから。

でも、平沢さんが来てくれなかったら、どうなってたかわからない。たぶんまた捕まって、もつとひどい目にあつてただろう。

……ハルが無事だったんだから、いいじゃないか。

そう思うことにした。

「じゃあ、早く逃げましょう」

ぼくの声に、平沢さんがあたりを見回す。

「そう言えば、荷物はどうされました？」

思わずハルと顔を見合わせる。

「すっかり忘れてたね」

「あいつらにとられちゃって……」

「じゃあ、ついでに取り返してきましようか」

すぐに荷物は見つかった。背負って帰ろうとするぼくたちに、平沢さんが言う。

「大事なものはだいじょうぶですか？」

「だいじなもの？」

「ええ。いちばん大事な、なくしたらこまるものです」

なくしたらこまるもの、というと……

ひとつしか、思いつかなかった。

右脇にいたハルの肩やほつぺたを、ぺたぺたと触ってみる。

「……なにしてるの、しゅーちゃん？」

きよんとしているハルを見ながら、平沢さんに言う。

「だいじょうぶです。なくなってますん」

平沢さんが、不思議そうな顔をしている。

……なんかおかしかったのかな？

もう一度、となりのハルを見直す。

……ちょっと、顔赤いかな？

「具合悪いの、ハル？」

「え、ううん、べつに……」

そう言うハルのおでこに、おでこをくつつけてみる。

「熱はないみたいだけど」

顔を離すと、さっきより赤くなったハルの顔。

「ハル、ほんとどうしたの？さっきより、もっとひどいよ！」

「いいから！」

そう言つて、ハルは横を向いてしまった。

「……いや、そういうことじゃなくてですね」

平沢さんが苦笑いする。

「何か、大事な荷物を取られてはいませんか？」

平沢さんの言葉に、あわててカバンの中を探してみる。

「携帯は？」「あるよ」「証明書は？」「だいじょうぶ」「お金は？」「うん、ちゃんとある」

「この服、お気に入りだったんだよ。よかった、とられてなくて」

「うん。カメラも服も、みんなある」

ぼくたちの答えに、平沢さんは納得しなかった。

「ほかに、なにかあるでしょう」

「もうほかに、大事なものってあったかな？」

ぼくの言葉に、ハルも首を傾げる。

「なんにもないと思うけど」

けれど、平沢さんは首を振る。

「そんなことはないでしょう。何か、おじいさまにもらいませんでしたか？」

「おじいちゃんに？」

「……おてがみ、かなあ？」自信なさそうに、ハルが言う。
「そっか。それがあつたね」

「手紙？」

「ええ。おじいちゃんに頼まれて、とどけてほしいって」

「……どんなものか、見せてもらえますか？」

平沢さんのことばに、ハルがバッグの奥から手紙を出した。

「これです」

ハルの手に握られた小さな封筒に、平沢さんが手を伸ばす。

「大事なものでしょうから、預かりますよ」

その手から、ハルが手紙を隠す。

「だめだよ。おじいちゃんのラブレターなんだから。ほかのひとに渡しちゃ、だめなんだよ」

「……しかし……」

あきらめきれないみたいで、平沢さんは手紙にまだ手をのばす。

……なんだか、おかしい。

「すいません、平沢さん。ちょっと……」

「なんででしょう？」

「ちよつと、うちに電話してもいいですか？」

その言葉に、平沢さんは少し顔をしかめた。

「あとにしてください。今はそれより逃げた方が……」

そういつて、またハルのほうに手を伸ばす。

……うん。絶対に、おかしい。

そうだよ。なんでこんなことに、気づかなかつたんだろ？

もうぼくは、迷わなかった。

平沢さんの視線の先にある手紙を、ぼくはハルの手からもぎ取って、ハルのバッグの中に入れ直す。

「ぼくらが持つていきますから、大丈夫です」

そういつて、ハルの手を引き、外へと向かう。

「すいませんが、帰らせてもらいます」

と、平沢さんがぼくらの行く手にさりげなく回り込んだ。

「そういうわけにはいきませんよ。一緒につれて帰らないと、こちらが怒られますし」

「しゅーちゃん、いつたいどうしたの？」

不思議そうな顔のハルに、ぼくは聞く。

「……どうして、こんなところに助けのひとがいるの？」

「……どういうこと？」

頭から？マークをとばしているハルに、質問する。

「……ハル。ぼくらは何に乗ってきた？」

「なにつて、夜行列車……」

「だよ。ひとばんかけて、ゆつくりがたがたゆられてきたんだ」

「それがどうしたの？」

「ハル。ぼくたちが誘拐されてから、何時間経った？」

ぼくの言葉に、ハルが時計を見る。

「今四時だから、二時間ぐらいだと思う。それがどうしたの？」

「……父さんもおじさんもおじいちゃんも、今あの町にいるんだよ？ たった二時間か三時間でここをつきとめて、助けに来ることなんことができるわけじゃない。いまごろ、連絡があつたとしたらこっちに向かつてる最中だと思うよ」

「べつにおとーさん達が来たわけじゃないでしょ？」

「でもさ。ぼくたちを助け出す、なんてことは、よっぽど信用のできる人にしか頼まないんじゃないかな？ じゃなきゃ警察か。警察に頼んだのなら警察が来るはずだし、それ以外の、例えば探偵さんとかに頼むのなら、とりあえず状況とかを探す人に直接説明しなきゃいけないから、一度会わなきゃいけないと思うんだ。そんな時間はないと思うよ」

「緊急事態だから、地元の人から東京での信用できる人を紹介してもらって、とりあえず動いてもらったんじゃない……」

「それでも、ここに放り込まれてからほんのちよつとしかたつてない。頼むにしても、それからたつたの二時間で、ぼくたちがどこで誘拐されたか調べて、どこに捕まっているか突き止めて、しかも助け出す。そんなこと、できるものなの？」

ぼくの疑問に、平沢さんは答えない。

「それに、こういうときは真っ先におとーさん達に連絡すると思うんだ。別に、電話一本ですむことだし。けれど、それをしなかった。なんだか嫌そうな顔して、おじいちゃんの手紙のことばかり」

「大事な手紙を預けてあるから、なくなっていないかどうか確かめてくれと、頼まれましたので……」

「嘘だ！」

自分でもびっくりするような、強い声が出た。

「嘘じゃないですよ。ちゃんと頼まりました……」

「誰に？」

「誰に……って？」首を傾げるハル。

「さつき、いったよね。誰か、裏切り者がいるって。おじいちゃん達に頼まれたのなら、ちゃんと連絡を入れるはずだよ。それに、そんな手紙よりぼくたちの無事を知らせて、安全なところまで逃がすほうが大事だと考えるはず。間違っても、連絡より手紙を気にかけるようなことはしない。」

……この手紙がほしいひとがいるんだね。ぼくたちの安全よりも」

そしてぼくはハルを背中後ろに隠して、いちばん大事なことを聞いた。

「……おじさん、誰？」

答えが来ないことは、わかっていたけれど。

第十二話 大迷惑

平沢さんは、答えないまま、ゆっくりと近づいてくる。さっきまでの、優しそうな顔じゃない。

あいつらと同じ顔。

自分の目的のためなら何でもする、と、顔に書いてある。いやな顔。

ハルを後ろに隠したまま、ゆっくりとさがっていく。

壁際に追いつめられた。

平沢さんの手が伸びてくる。

体の後ろに手紙を隠したとき……

急に平沢さんが頭を抱えた。

彼の後ろには、棒を構えた金髪の男。

さっき殴り倒された男達が、反撃に出たんだ。

不意を付かれて、男はよろめく。

そのすきを、ぼくは見逃さなかった。

黙って強くハルの手を引く。

男達がやりあっているすきに、そおっとそおっとドアによって音を立てずにいちもくさんに。

大きく開いた入り口から外に出る。

薄暗い倉庫から急に明るいところに出たから、目がくらんだ。後ろのハルを確認して。

ちよつとだけ胸をなで下ろす。

さっきまで捕まっていた倉庫を振り返る。

倉庫には、「高月製紙」とだけ書かれていた。

あたりを見渡して、人のいなそうな方向に歩き出す。

と、ハルに腕をひかれた。

「どこいくの、しゅーちゃん？」

「あっち。ひとのいないほう」

ぼくの返事に、ハルは思い切り顔をしかめた。

「……だめだよ、しゅーちゃん。そんなんじゃ、つかまっちゃうよ！」

「じゃあどうするんだよ？」ちょっとだけむっとしたのが、声に出た。

けれど、ハルは気にしない。

「わたしにまかせて！」

さっきのハルの顔。何か考えがあるときの、あの笑顔。

「ちゃんと、ついてきてね！」

そういうと、ハルは走り出す。

さっきとは反対側。つきあたりには、人でいっぱい的大通り。

「ハル、そっちは……」

「なるべく、ひとのおおいほうににげるの！」

「そんなことしたら、見つかったちゃうよ！」

「ひとのいないほうに逃げてもおなじだよ。とにかく、ついてきて」「でも……」

反対しようとしたぼくの耳に、後ろからいくつもの足音。

どうやら、あいつらが気づいたらしい。

迷うのはあとだ。とりあえず、ハルについて走り出す。

「しゅーちゃん！」

びつくりするくらいの声で、ハルが叫ぶ。

「なるべく、おっきなこえでさげんで！」

「そんなことしたら、ぼくらの居場所わかったちゃうよ！」

「だいじょうぶだから！」

自信たつぷりのハル。こんな時は、何をいつても無駄だ。

……それに、たいていはうまくいく。

「『助けて！』つてさけぶの？」だからぼくはあきらめて、これからどうするかハルに聞いた。

「もつとだめだよ！そんなことしたら、私たち、助けられちゃうよ？」

……そっか。忘れてたけど、ぼくたちは家出中だった。

いつかは見つかるにしても、警察に捕まってお説教されるのはいやだった。

「それ以外なら何でもいいから、とにかくおつきなこえで！」

「こんなふうには？」

そこらじゅうにひびきわたるような声で、ぼくが返す。

「そう、それでいいの！」

ハルが嬉しそうに笑う。

「どうせみつかるんだったら、おもいつきり大騒ぎにしちゃうんだよ！」

「そんなこと……」

納得できないぼくに、ハルが振り向いて、笑う。何かいたずらを仕掛けるときの、自信たつぷりで、これから何が起きるかにわくわくしている、あの顔。

「しゅーちゃん。追っかけられてるのは、あいつら、それとも私たち？」

「……ぼくたち」

「小学生二人をおおぜいの大人が追っかけるの。ぱつと見て、わるものどっち？」

「むこう」

「だったら、だいじょうぶ。きつとみんなが、あの人達を止めてく

れるよ！」

そう言って、ハルは大通りの中へと飛び込んだ。
あわてて、ぼくも追っかける。
離れないように、しっかりと手をつないで。

はじめての街の中。

どこからこんなに人がきたのかしらないけれど、ぼくらの町では見たこともないほどの人。

その中を、走る、くぐる、飛び越える。

カップルの間をすり抜け、ガードレールを飛び越え、人波をくぐり抜ける。

そのたびにあっちこっちで声がするし、ぼくらは大きな声でしゃべってるから、居場所はすぐにわかるはず。

けれど男達は、ぼくたちのほうに近づけない。

人波にじゃまされて、だんだんと離されていく。

悲鳴と怒鳴り声。それで、向こうの位置はこっちにもわかってしまう。

……そっか。

だからハルは、町中に飛び込んだんだ。

人のいないところなら、ぼくたちの足じゃ大人にすぐに追いつかれる。

けれどここなら。

速さじゃなくて、すばしこい方が勝つ。

それに、あたりのひとがいる。

ハルの言つとおり、これだけ人目があればそんなに無茶なことはできない。

でも、こっちは子供だから、たいていの無茶は大目に見てもらえる。

だから、できるだけ派手に「しなきゃいけない」んだ。

……やっぱハル、頭いいや。

通知表は「もうすこしががんばりましょう」ばかりだけど。

「……なんか言った？」ちよつとハルにいらまれた。

「なんにもー！」知らんぷりして目をそらす。

だつたら……

「ハル、こつち！」

大きな声で呼びながら、なるべく店に近い、人の多いところを選んで走る。

自転車が止めてあるところのすぐそばで、直角に曲がって逃げる。後ろの一人が曲がりきれずに、自転車の列に突っ込んだ。

大きな音がして、順番に自転車が倒れていく。

また一人、今度は靴屋の店先に突っ込んだ。

派手な音がして、色とりどりの靴が下に散らばる。

男はそれでもぼくらを追いかけようとして、店員に捕まった。

怒り狂う店員をにらみつけ、立ち去ろうとして、周りの人に捕まえられる。

「どういうつもりだ、こんなところで！」

「あんな小さい子を追っかけ回すなんて！」

周りの人に怒られて、彼は動けなくなった。

それでも、まだ追いかけてくる人はいる。

だんだんコツをつかんできたみたいで、少しづつ手が近づいてくる。

なんとかこいつらの目を、ほかのところに向けないと……

ひらめいた。

「ちよつと待っててね、ハル」

急に立ち止まって、あいつらの方に向き直る。

走つてた勢いで二、三步後ろに下がってから、手に持っていたリュックを、まるで違う方向に力一杯投げ飛ばす。

リュックは十メートルくらい飛んで、道路の反対側のちょっと小さな街路樹にぶつかって止まった。

「しゅーちゃん、カバン！」あわてたようなハルの声。

「いいんだ。お金と証明書は持ってるから。それに、手紙はハルのカバンの中でしょ？」

今度だけは小さな声で。

「……だったら、なんでカバンを捨てたの？」

「手紙がこのカバンに入ってるかどうか、むこうにはわからないから。もし手紙がほしいのなら、とりあえず拾って中身は確かめるでしょ？」

ぼくの説明に、ハルがちよつと泣きそうな顔になる。

「でも、あの中にはしゅーちゃんの大事なものの、いっぱい……」

「どんなだいじなものでも、ハルがいなくなったらなんにもならないよ」

そう言つて、ハルの手からカバンを取ろうとする。

「ぼくが持つよ。だいじょうぶ、投げたりしない」

そう言つて伸ばした手に、でもハルはカバンを渡さなかった。

「いいよ。わたしが持つてく」

「でも、重いだろ？」

「だってこれ、私の荷物だもん。しゅーちゃんに迷惑かけるの、いやだよ。じぶんのことはじぶんでするの」

「……そっか」

ハルの言うこともわかるから、手を引つ込めて後ろを見る。

ほとんど人は減ってなかった。

平沢さんはリュックを拾いにつけたけど、誘拐犯達はそっちには目もくれずに追っかけてきている。

あわててまた走り出す。

「こわい？」なんとなく、聞いてみた。

「ちよつとだけ。でも、すつごくおもしろい！」

楽しそうな声で、ハルが言う。

「やっぱそうか。ぼくもだよ」

こんなこと、普通じゃ絶対にできないし。

ひとりではこわいだろうけど、となりにはハルがいる。

だったら、だいじょうぶ。どんなときでも。

お互いに顔を見合わせて、笑って。

それからまた走りだした。後ろの男達を振り払うために。

第十三話 じどもとじども

遠くから、男達の怒鳴り声が聞こえる。

声はどんどん大きくなって、目の前を通り過ぎ、やがてだんだん小さくなっていく。

そのうちに、完全に声が聞こえなくなった。

しばらくしてから、頭の上の水色のふたに手を伸ばす。

かぱっ、と音がして、ポリバケツのふたが開いた。

大通りの一つ入った裏路地。あたりはビルの水道管や配線ばかりで、人の姿は見えない。

となりでハルが頭を振って、

「あーあ。せつかくいい服着てきたのに。どろどろー……」
ちよつと悲しそうに言う。

「それより、これからどうする？」

「もう一度、おんなじことして駅まで……」

「駅までは行けるだろ。でも、それからどうするの？」

あいつらはまだこれからもぼくらを追いかけて続けるだろうし、こんな騒ぎになった以上警察も動き出すかもしれない。お父さん達も、たぶん必死になって探すはずだし、ずいぶん心配してると思う。

……うちに帰った方がいいかもしれない。

けれど、それまでにあいつらに捕まったら、今度こそどうにもならない。

とりあえず、注意しながら表通りへと出る。

右を向いて、左向いて、また右を確かめたところで肩を叩かれた。とっさにハルを後ろに隠して飛びのく。

「……そんなに驚いた？」

どこかで聞いた声。

「……東さん？」朝、電車の中で助けてもらった人だ。

「どうしたの、こんなところで？」不思議そうな顔で、東さんが聞いてくる。

「ちよつと事情があつて……」

ぼかして答えようとしたら、逆にそれが興味を引いたらしい。

「なにに。おねーさんに話してみなさい」

『おねーさん』をやけに強く発音して、東さんが言う。

ハルト、顔を見合わせる。

答えはすぐに出た。

この人は、信用できる、と思う。朝だって、会ったばかりのぼくらを助けてくれたし。

「ちよつと長くなるんですけど……」

そう言つて、ぼくはこれまでのことをゆっくりと話し出した。

「……だったら、家に来ない？」

ぼくたちの話を聞き終わると、東さんはそう言った。

「でも、もし誘拐犯達に見つかったら、東さんまで……」

「だいじょうぶ。どうとでもなるわよ」

なぜか自信たつぷりに、東さんが言う。

「でも、それが何とかなつたらちゃんと帰るのよ」

その言葉に、ハルが考え込んで、

「じゃ、お願いします」とぼくは言った。

「しゅーちゃん!？」

ハルが驚いた顔をする。

「だって、このままじゃ逃げ切れるかどうかかわからないし。ハルが残念なのはわかるけど、みんな心配してるだろうし。今はいったん落ち着いて、帰るしかないと思うよ」

そう言うと、ハルはちよつとの間すごく難しい顔で考え込んで、

「……わかった」とだけ、答えた。

とても、小さな声だった。

車に乗り込み、ビルの中の駐車場をでたところで、あいつらの車を見つけた。

「ははあ。あいつらね」

あいつらが、こちらに気づいて、あわてて車に乗り込んでいく。

「ど、どうするんですか？」

「どうするもこうするも」

そういつて、東さんはにつこりとほほえむ。

……なんだか、寒気がした。

「しっかりつかまってなさいね！」

「っ、つかまってって……」

最後までしゃべることはできなかった。

車がいきなり、ものすごいスピードで走り出したから。

急ブレーキとクラクションの音。

そのたびに、ぼくとハルは後ろの座席を転がり回る。

後ろの車がついて来るどころの騒ぎじゃない。

ものすごく楽しそうな声で、東さんが言う。

「一度やってみたかったのよね、カーチェイス」

……ひょっとして、捕まった方が安全だったんじゃない……

「東さん東さん、信号赤！」

「え、赤は注意してすすめてことじゃないの？」

「なんかメーターから音が鳴ってる！」

「たかが50キロオーバーじゃない」

「もう、誰も追っかけてきてませんよ！」

「まだまだわかんないわよ！」

……もうたぶん、何を言っても無駄な気がする。

なんとか手足を突っ張らせて、ハルが転がらないように抱え込むしか、できることはなかった。

しばらくして、車は小さなアパートの前に着いた。

「なんとか無事についたわね」車から降りて、満足そうに東さんは言う。

「……無事？」

真つ青な顔のハルを見ながら、ぼそぼそとぼくはつぶやいた。
ハルに肩を貸して、アパートの二階へ。

「おじやます」

きちんとあいさつして、家の中にはいる。

小さいけれど、きれいに整頓された、あたたかな感じの部屋。
廊下を通って、奥の部屋へ。

電話の横に立てかけてある写真が、ちょっと気になった。

セピア色の、もうずっと前に撮ったらしい写真。

「なにしてるの？」

「……うん。なんでもない」

写真を置いて、また歩き出す。

キッチンに通されて、ジュースを出してもらった。

「それじゃ、とりあえず……」

そういいかけたところで、奥から泣き声が聞こえてきた。

赤ん坊の泣き声だ。

それを聞くと、東さんはすっ飛んで出て行って、しばらくしてから
小さな赤ちゃんを抱えて戻ってきた。

「ごめんね、話の途中で」

そっぴいながら、東さんは優しく赤ちゃんをあやしていく。

「お子さんですか？」

「そっぴー。かわいいでしょう？」

嬉しそうな顔で、東さんが言う。

けれど、泣いている今は、あんまり可愛いとは思えない、悪いけど。

と、ハルが赤ちゃんに手を伸ばした。

ほっぺたのあたりを少しつつく。

びっくりして泣きやんだ赤ちゃんは、ハルの手を不思議そうに見て、ゆっくりと手を伸ばす。

そのまま、ハルの指をぎゅっ、とつかんで笑い出した。きげんが直ったらしい。

しばらくハルの指で遊んでいた赤ちゃんが、東さんの方に顔を向ける。

何か、聞きたいみたいだ。

「あ、まだご挨拶してなかったね、駿君。遙お姉ちゃんと周哉お兄ちゃんだよ。こんにちはのごあいさつは？」

東さんの声に、駿くんは笑って手を振る。

「こんにちは、駿くん」ハルのあいさつに、

「ねーたん？」さっき覚えただかりの言葉で、駿くんが聞き返した。

「うん、ねーたん」

それからぼくの方を向いて、

「ねーたん？」

「ううん、にーたん」

「ねーたん」

何度が繰り返した東さんが、ちよつと肩をすくめる。

「ごめんね、まだこの言葉あんまり知らないから」

「いいですよ」

ちよつと引きつった声で、ぼくが言う。

その間に、下に降りた駿くんは忙しくはい回っていた。

あたりのクッションにじゃれついたり、ハルやぼくのそばに寄ってきて、ぺたぺたとさわってきたり。

ちつともじつとしていない。

「こら！駿くん！おねーちゃんたちにめいわくでしょ！」

東さんの声にも、全然やめる気配がない。

「いいですよ、かわいいし。ぜんぜん迷惑じゃないです！」

駿くんの手をかわしながら、ハルが言う。

確かに、ちつともいやじゃない。なんだか、見るだけで顔がゆるんでしまう。

いつもなら、おじさん達に頭をなでられるのだっていやなのに。

……なんでだろ？

「ずいぶん気に入られたみたいね」

東さんが苦笑いした。

「そうなんですか？」

「ええ。いつもはもっと人見知りするし、あんなに早く泣きやまないのよ」

「ハルは誰とでもすぐに仲良くできますから」

「そんな感じね……」

「いいな、うちにもいないかなあ、赤ちゃん……」

テレビの台に上ろうとする駿くんを見ながら、うらやましそうな声でハルが言う。

「そうでもないわよ、毎日世話するの大変よ？」

そういいながら、東さんは本当に嬉しそうだ。

その言葉に、ハルは自信たっぷりに答える。

「だいじょうぶ。しゅーちゃんの世話で慣れてるから！」

「……おい」

ぼくが抗議する前に、東さんがくすくす笑いながら、言った。

「だったら、また会いに来る？駿も喜ぶと思うし」

「うん！」

ぼくとハルの返事が一緒になって部屋に響いた。

第十四話 推理

「……伏見さん、今なんて言いました？」

……さつき。

お父さん、おじさんと電話して、こつぴどく怒られてから、おじいちゃんのところへ電話した。

おじいちゃんは留守らしく、代わりに電話に出た伏見さんは、ひととおり怒って心配したあと、いきなりこういいだした。

「あの手紙は、ちゃんと渡して置いて欲しいそうです」と。

「ちょっと待ってください。でも、その手紙のせいで変な人に追っかけられて……」

「そちらは必ずなんとかします。……詳しくは言えませんが」

そう言った伏見さんの声は、いつもとはまるで違って、すごみがあつて。

「それでも、ハルをそんな危ない目には……」

なんとか食い下がったばかりに、すまなさそうな声が聞こえる。

「周くんたちには悪いけれど、おじいさまがどうしてもとおっしゃるので。申し訳ありませんが、お願いします」

びつくりした。伏見さんは礼儀正しいけど、ぼくらに頼み事をする時にここまででいいいなことを使う人じゃなかったから。

「よつぽど、だいじなことなんです」

「どうしても」という感じが伝わってきて。

なんとなく、断れなかった。

電話を切ると、急に今日一日の疲れが押し寄せてきて、ぼくは床上に転がった。

「つかれた……」

ソファーに寝転がって足をばたばたさせながら、ハルが言う。

「あれから、まだ一日もたっていないんだよ？」

「うん」

「でも、おもしろかったね！こんなこと、もう絶対にできないよ！」

「……うん」

気のない返事。

ああむけになって、ぼうつと天井の蛍光灯を見る。

それが、ふいに暗くなった。

「しゅーちゃん。どうしたの？元氣ないよ？」

頭の上に、心配そうなハルの顔。ソファーの上からぼくをのぞき込んでる。

「もう終わったんだしさ、もっとげんきだそうよ」

「ハル。まだ、なんにも終わってないんだよ」

頭の上でのんきな顔してるハルに、ぼくは言った。

「あの人が誰なのか。どうして、ぼくたちが誘拐されたのか。」

平沢さんは誰に命令されて動いてたのか。誘拐犯達は誰と手を組んでいたのか。

なんにも、まだ。

それがわかんなくや、またおなじことになるかもしれないよ？」

「もうだいじょうぶでしょ、なんとか逃げ出せたんだし」

「わかんないよ。これから無事かどうかもわかんない。だって、この事件のこと、まだなんにもわかってないから」

ぼくの言葉に、ハルもすわりなおして、顔をしかめて考える。

しばらく考えてから、

「しゅーちゃん、なんか考えついてるんでしょう？それから教えてよ」
少し首を振って、ハルが聞いてきた。

「ちょっとだけ、ひっかかっていることがあるんだ」

考えをまとめながら、ゆっくり話し出す。

「あの誘拐犯達、どうしてあの倉庫にいたんだろ？」

「……どういうこと？」

「ドラマとかだと、ふつう犯人はひとけのないところにぼくらを閉じこめると思うんだ。空き家とか、つぶれた工場とかさ。でも、あの倉庫は今でもちゃんと使ってるんだよね。中身入ってたし」

「それがどうかしたの？」

「使ってる倉庫なら、警備員がいたり防犯システムがあつたり、すると思うよ。中身盗まれたら困るでしょ？でもあいつらは、そんなの気にもしないであの倉庫使ってた」

「……あの倉庫の社員だったら、使えるかも……」自信なさそうに、ハルが言う。

「ただの社員が防犯システムをどうかできるとは思えないよ」

「ていうと？」

「これはぼくの想像なんだけど」そういつて、言葉が続ける。「『裏切り者』の持ち物なんじゃないかな、あそこ。そうじゃなくても、彼のにらみの利くところ。だとすれば、あれだけ勝手に使えた説明ができる」

ぼくのことばに、ハルはおとなしく頷いている。

「それから、もうひとつ。どうして平沢さんは、あんなにタイミング良くぼくたちを助けられたの？」

「？」言われたことがわかんなかったみたいで、ハルの頭に大きなクエスチョンマークが浮かぶ。

「だってさ。ぼくたちが逃げ出して、捕まりそうになったところでききなりあらわれて、

誘拐犯達を倒してくれた。なんか、見せ場を狙ったような感じがしない？」

「……外で、ずーっと見てたんだ！」ハルの目がまん丸になる。

「たぶんね。でも、それよりもっと大きな疑問があつてさ。

……そもそもなんで、平沢さんはぼくたちが閉じこめられていたと

「ころがわかったわけ？」

「警察もおじいちゃん達も、ぼくたちがあそこにいることなんか知らなかったはずだよ。知ってたら、すぐに動いたはずだし、だいたひ誘拐されて二時間も経ってなかったんだよ？どんな名探偵でも、まず見つけられないと思うんだけど」

ハルが言葉の意味を理解できるまで、少し待つ。

「偶然……じゃないよね」

「もちろん。そんなことあるわけないよ。……知ってたんだ、平沢さん。ぼくらがどこに閉じこめられてるか」

「あとをつけてきたとか？」

「夜行列車の男みたいに？たぶん、それはないと思うな。誘拐犯達だつて警戒してたろうし、ぼくらだつてちゃんと注意してたでしょ？」

「すると、どうなるの？」

「……さっき、誘拐犯達が平沢さんとでくわしたとき、あんまり驚いてなかったよね」

「うん。なんか、知り合いにあつたみたいな感じだったね。簡単に中に入れちゃったし」

「……知り合いだったんだよ、たぶん」

「……どういふこと？」

「仲間だったんだ、平沢さんと誘拐犯」

「！？」

「なんで、そうなるの？」びつくりしたらしいハルが、急いで聞き返す。

「平沢さんは、誰かの命令で動いてたんだよね」

「うん」

「それは、たぶん『裏切り者』だよな」

「うん」

「『裏切り者』は、誘拐犯達ともくんでたんだよね」

「……うん」

「だったら、平沢さんと誘拐犯が仲間でもおかしくないよ」

「たぶん、平沢さんが直接『裏切り者』から命令されて、誘拐犯達と連絡を取ってたんだよ」

「……誘拐犯達は、『裏切り者』を知らないの？」

「うん。誘拐犯達は、あんまり重要なことを知らされていないと思うよ」

「どうしてそうおもうの？」

「さつきさ。カバンを捨てたとき。平沢さんは拾いに来たけど、あいつらはそのまま追っかけてきた。それから考えて、あいつらはあの手紙のこと知らないんだよ。たぶん、あいつらは……」

「やられ役」言葉が思い出せないばくに、ハルの助け船。

「そう、それ！それだよ。最初からやられ役だったんだ、あいつら。本命は平沢さん。」

……たぶん、裏切り者は、お金なんか欲しくなかったんだよ。欲しかったのは、手紙だけ。

あんなやり方でお金が取れるとは、最初から思ってたんだね。それで、ぼくたち誘拐して。誘拐がうまくいったら、平沢さんがいかにも正義の味方みたいにしてでていつて、誘拐犯をやっつけてぼくたちに恩を売る。そのときに、いかにも親切そうな顔で手紙を盗めばいい」

呆然としているハルに、そう説明する。

「とすると、問題なのは、あの倉庫の持ち主だよな」

なんとか立ち直ったハルが、聞いてきた。

「それが『裏切り者』の可能性が高いからね」ぼくも、うなずく。

「なんか、手がかりとかない？」

「うーんと……」

そのとき、思い出したこと。

あの倉庫から逃げ出すとき、ちらつと見かけた、会社の名前。

見覚え、ある。

そばの本棚を探し回る。

目指す本は、すぐに見つかった。

「会社旬報」と書かれた分厚い本。

その本の最初の方をぱらぱらめくる。

「あつた」

「高月製紙」と書かれた欄。

【高月グループ】高月一族が今でも経営権を握る。業務建て直しに懸命。

社長 高月光彦

「……やっぱり、か」

そのページを見ながら、ぼんやりとぼくはつぶやく。

「よく考えれば、身内であんなことするのは、光彦おじさんしかないんだよ。おじいちゃんがそんなことするわけないし、父さんやおじさん……ハルのお父さんなら、ぼくらを誘拐する意味ないじゃない？」

「それに、光彦おじさんならわたしたちが旅行に行くこと知ってるしね」と、ハル。

「……そうだった？」

思い出せないぼくに、あきれ顔のハルが説明してくれた。

「おじいちゃんどこにあいさつにいったとき、会ったじゃない」

そういえば、そうだった。たぶんあのときに、詳しいことを知ったんだろう。

「……いまわかるのは、これだけ。でも、わかんないよりはずいぶ

んいいと思うよ?」

ちよつとだけ得意な顔になる。

「……すごいすごい、しゅーちゃん!」

ハルがいきなり飛びついてくる。

「わ、ハル?!」

「たつたあれだけで、よくここまでわかったね!」

顔が赤くなった。すつごく照れくさい。

「でも……」ふいに、ハルが変な顔をする。

「しゅーちゃん、へんだよ」

「どこが?」

自分の推理は完璧だと思っていたから、ちよつとだけむつとなった。
「だつてさ……」考え込みながら、ハルが言った。

「そうすると、あの手紙を手に入れるためだけに、倉庫一つ使つて誘拐を仕組んだ訳だね。でも、そこまで大がかりなこと、どうしてしなきゃいけないの?ちよつとカバンをひったくれば済むことじゃない。なんで、わざわざこんなこと……」

……たしかに、それもそうだ。手紙一つにしては大げさすぎる。

「……そういえば」

考えれば、まだまだわからないことはあつた。

「ぼくも、これだとわかんないことはあるんだ。…どうしておじさんは、今こんなことしたんだろ?」

「……どういうこと?」

「もしおじちゃんにこんなことがばれたら、ただじゃすまないはずだよ。おじさんがやったことくらい、すぐにわかつちやうだろうし」

「ぼくらでもわかるくらいの計画だ。ちよつと時間が経てば、すぐにみんなにばれてしまうだろう。」

お互いうなつて、腕組みして考える。

……でも、五分考えても十分考えても、納得できる結論は浮かんでこなかった。

「降参！」

しばらくして、ハルがひっくり返る。

「わかんないよ、こんなの！」

「ぼくも、わかんないや」

こっちも床へとひっくり返る。

「これ以上考えたって、無理だよ」

「うん。犯人は分かったんだし、あとはおうちに帰ってからでいいか」

そういつて、ハルに笑いかける。

「ほんと、がんばったからさ。あとは父さん達が迎えに来るまで、遊ぼうよ。せつかくの旅なんだし」

「うん！」

満足そうに言ったハルは、そのままテレビのリモコンをとる。

「ちよつとテレビみたい。もうすぐ漫画が始まるの」

そう言えば、いつもこの時間はハルは家でテレビを見てたな。

「うちの方とこっちじゃ、テレビの時間違うかもしれないよ？」

「いいの！つけてみなきゃわかんないでしょ？」

そういつて、強引にテレビをつける。

「経済トップアイの時間です」

真面目そうなニュース。

「ほら、やっぱやってないじゃん、ハル」

「ううー……」不満そうなハルを無視して、チャンネルを変えようとしたとき。

「次のニュースです。……高月電機の元会長、高月作蔵氏が倒れ、

現在手当を受けている模様です」

聞こえてきたニュース。

それはぼくたちが予想もしていなかったことで。

「きのう午後二時ごろ、自宅で急に心臓の発作を起こし、現在病院で手当をつけているということです。一代で日本有数の電機メーカーを作り上げた立志伝中の人物の入院は、グループ内部に大きな波紋を呼びそうです」

今までの楽しい気分も、せっかく考えた推理も、ぜんぶ吹き飛ばしてしまふようなものだった。

第十五話　みたくなかったこと

「……おじいちゃんが、倒れた？」

今聞いたことが信じられなくて、ハルと顔を見合わせる。

すぐにリモコンに飛びついた。

何度も何度もチャンネルを変える。

あちこちの局のニュースの最後の方で、さっき聞いたのと同じ言葉。

「……そうだ、うちに連絡しないと！」

ぼくの声に、ハルが電話に飛びついた。

うちに電話してみたけれど、誰も出ない。

おじいちゃんも、伏見さんもない。

何度も何度もかけ直してから、ハルがやっと口を開く。

「だれもないよ」

「……たぶん、病院に行っちゃったんだ」

「……ていうことは……」

「たぶん、本当だよ。ほんとに倒れちゃったんだ、おじいちゃん」

「きのうまで元気だったのに。なんで、急に……」

「……元気じゃなかったみたいだよ、きのう」

驚くハルに、説明する。

「さっきテレビで、なんて言ってた？」

「昨日倒れたって……」

ぼくの言いたいことに気が付いたらしい。

「うん。ぼくたちが出発するときに、もうおじいちゃんは倒れてたんだ。昨日父さん達が呼び出されてたのは、たぶんそのせい」

「……だから、お父さん達、急に行くなっていったんだ？」

「そうだよ、きっと。お父さん達、いったん決まったことを理由も

なしに破るような人じゃないもん」

そのまま、僕もハルも少しだけ黙る。

「でも、どうして理由をいつてくれなかったんだろ？言ってくれたら、ぼくだって絶対に行かなかったよ？なのに、なんで……」

「……言えなかったんじゃないかなあ」

ハルが、ぽつりという。

「どうということ？」

「ふつうに、ただ倒れただけだったら、ちゃんと教えてくれると思うの。でも、もしうんと重い病気で、…どうにもならないような、そんな病気だったら……」

ハルの言葉に、この間挨拶にいたときのことを思い出す。
言われてみれば、あのおいちゃん、いつもよりずっとやつれて見えた。

いつもなら、ぼくたちが遊びに行ったら、どんなに具合が悪くても、ぜったいにふとんにねたままなんてことはなかった。

ふつうに、自然に笑ってたから、気が付かなかったけれど。

「……確かに、全国ニュースで流れるくらいだもんね。ちよっと倒れただけなら、そんな大ニュースには……」

ぼくの声に、ハルはいきなり立ち上がった。

「早く帰らなきゃ！おいちゃん、死んじゃうよ！」

そういうなり、自分の荷物をまとめはじめる。

「しゅーちゃんは？」

「ぼくはさっき荷物捨てちゃったから。すぐに準備できるよ」

「じゃ、はやく！」

今にも飛び出しそうなハルを落ち着かせようとして、

なにか、ひっかった。

おかしなことに気が付く。

「……待つてよ、ハル。おかしくない？」

「なにが？」焦っているせいか、いつもよりとがった声。

「だつてさ。さっき電話したとき、伏見さんそんなこと言つてた？」

「……そういえば」

「言つてないよ、ね」

「おじいちゃんが倒れたんだつたら、すぐに戻つてこいって言つは
ずだよ。伏見さんだけじゃない、父さんもおじさんも」
ぼくの言葉に、ハルの動きが止まる。

「へんだよ。ぜつたい、おかしい」

「じゃあニュースが嘘ついてるの？」

「それはないと思う。もし、あるとするなら……」
ふと、おもいついたこと。

「父さん達が、ニュースの人にうそをついてるのかも」

「どうして？」

「……わかんないけど」

倒れたのを隠すならわかるけど、倒れてないのを倒れたという理由
がわからないし。

「ハル、携帯持つてる？」とりあえず、もついちどかけてみよう。

「あ、うん」

ハルの携帯を試してみる。着信は、ない。

「ハル。電源きつてた？」

「ううん。ずっとつけたままだったよ」

ハルが答えて、

「どうして、電話かかってこなかったの？」

二人一緒に声が出た。

「おじいちゃんが倒れたのつて、きのうだよ。だつたらどうして、

誰からも電話がかかってないんだろ？」

「子供が家出したんなら、普通はまず携帯に電話するでしょ？警察だのなんだのは、そのあとの話。なのになんで、着信一つないの？」
僕の疑問に、ハルも頷く。

「ふつつ、まず電話かけると思うんだ。ぼくらだって、そうしたでしょ？助かったときに、すぐに父さん達に連絡したし」

「うん、へんだよ。絶対におかしい」

眉間にしわを寄せて深刻そうな顔になるハル。

「ほかに、おかしいこと、いっぱいあるような気がするよ」

「例えば？」

「なんで、ぼくたちこんなところにいるの？」

「？」

ハルが首を傾げる。

「ふつつ、誘拐とかだったら、もっと逃げ出すの難しいと思うんだ。少なくとも、ぼくたちみたいな子供にあっさり逃げられるようなこととはないと思う」

「そういえば……」

「あっちこつちで、ぼくらに都合がいいことが起きたから。だからなんとか逃げ出せたんだ。……でも、なんでそんなに都合のいいことが立て続けに起こったんだろう」

ぼくの言葉に、ハルは腕組みして考え込んだ。

「それから、もうひとつ。この、手紙のこと」

そういつて、ハルのカバンの中からあの手紙を取り出す。

「結局この手紙のせいで、みんな大騒ぎしてるみたいだ」
ぼくの言葉に、ハルも頷く。

「この手紙、そんなに大事なもののかな……」

「たぶんね。あの人達が必死で盗もうとしてたんだし」

「そういうことじゃなくて……」

何かいいたそうなハルをさえぎって、疑問をぶつける。

「……でも、だとしたら、なんでおじいちゃんはおくたちにそんな大切なものを持たせたんだろ？」

「どういうこと？」

「そんな、誘拐までして手に入れようとするくらい大事なものなら、普通はもつと信用できる大人に頼まない？ おくらよりも、もつと上手に安全に手紙を持っていける人に」

ハルの目が、こっちがびつくりするくらい大きく開いた。

「わたしたちがちょうどここに来るから、ついでだったんじゃないの？」 自信なさそうに、ハルがつぶやく。

「だったら会社の人たちだっているし、ほかに頼める人なんかいくらでもいるじゃない。わざわざこんな子供に持たせることはないよ。……おくらたちに渡させる理由が、何かあるんだ」

「どんな理由？」

「……それは……」

そうやって、考えているうちに、
気づいたこと。

「……ハル」

いつもより、ずっと低くて小さな声で、ハルにきいてみる。

「光彦おじさんに、おくらの予定なんか言った？」

はじめ、不思議そうな顔をしていたハルが、さっと顔色を変える。

「……言っていない。しゅーちゃんにとめられたんだよ、たしか！」

「そうだよ、ハル。おじさんは、おくらの動きを知らなかったはずなんだ。どこへいくかまではわかってても、予定表なんか知ってるはずがない。だれか、知ってる人が教えたんだ」

「誰が？ 誰が教えたの？」

「わからない。一応知ってるのは、ハルんちのおじさん、お父さん、

それからおじいちゃんなんだけど」

「三人とも、わざわざ光彦おじさんにそんなこと教えたとは思えないよ」

ハルの言葉に頷こうとして。

「……ちよつと待った」

なんか、胸の中がざわざわする。

すごく嫌な予感。

「どうしたの、しゅーちゃん？」

様子が変わったのに気づいたらしい。心配そうにこっちを見るハル。
「……最初から、考えてみようよ」

ゆつくりと、話し出す。

「最初、ぼくらは旅行に行けなかったんだよね？旅行に行けるようにしてくれたのは、誰？」

「おじいちゃん」ちよつと変な顔をして、ハルが答える。

「あの手紙を、ぼくらに持たせたのは？」

「おじいちゃん」

「出発する前に、おじいちゃんが倒れたこと、ぼくたちに伝えさせなかったのは？」

「……？お父さん達じゃないの？」

「これじゃまだ、わかんないよね」僕は少し笑って、

「お父さん達に携帯をかけさせなかったのは？」

「！？」……おじいちゃん？」

「うん。お父さん達はぼくらの旅行に反対だったし、そんな事情があるならすぐに『帰ってこい』って電話すると思う。それをしなかったのは……」

「おじいちゃん本人に、止められたから？」

「……うん。父さん達個人の都合だったら、絶対にそんなことはしないと思うんだ。それより、すぐに帰ってきて欲しいと思ってたはず」

「……だとしたら、さっき電話したとき、父さんや伏見さんに、帰ってこいといわせなかったのも？」

「おじいちゃん、だらうね」

「……おじいちゃん、なんでそんなことを？」

ハルの疑問に僕は答えず、次の質問を口にする。

「……これが当たってるなら、ここまでの筋書きを全部書いてたのは？」

「おじいちゃん」

「だよ。今いったことが全部できるのは、おじいちゃんしかいないよね」

少し、声がうわずっているらしい。ハルが変な顔をした。

「とすると、おじさんにぼくたちの予定を教えたのは？」

「……おじいちゃん」

「そうだね。でも、そうすると、」

一度、言葉が切れる。その先を言うのが怖かったから。なんとか言葉を続ける。

「……ぼくたちを、誘拐、させたのは……」

呆然とつぶやくハル。

「……おじい、ちゃん……」

ぼくもハルも、しばらく何も言えずに黙っていた。

こんなこと、考えもしていなかったから。

「で、でも！」どうにか声を出せるようになったらしいハルが、あわてたように聞いてくる。

「光彦おじさんならともかく、どうしておじいちゃんがそんなこと

しなきゃいけないの？おじいちゃんは、お金もいらない。もちろん、手紙なんかいるはずがない。もともとおじいちゃんが書いた手紙なんだから。なのに、ここまで手の込んだこと、どうしてしなきゃいけないの？」

「わかんないよ」ぼくは、小さく首を振る。

「でも、今いったことができるのは、おじいちゃんしかない。何か大事な理由があるんだ、何か……」

その何が、今のぼくにはぜんぜん思いつかないけれど……

「……その理由って、わたしたちより大事なの？」
ハルが叫ぶ。

「どんな理由か知らないけど、わたしたち誘拐して、しゅーちゃんあんなめにあわせてさ。そんなことまでしなきゃいけない、どんな理由があるの！」

ぼくには答えられない。

「わたしたち、遊びに來ただけだったのに。どうしてみんな、こんな勝手なことばかり。」

父さん達もおじいちゃんも光彦おじさんも。みんな……だいつきらい！」

体の底からしぼりだしたみたいなハルの叫び声だけが、ぼくとハルのほかに誰もいない部屋に、いつまでも響いていた。

第十六話 おまじない

「どうして、おじいちゃんが、そんなこと？」

少し落ち着いたらしいハルが、ぼくに聞いてくる。

「わかんないよ」

「おじいちゃん、わたしたちのこと嫌いだったのかな？」

「わかんないよ」

「おじいちゃん……」

「わかんないよ！」

つい、怒った声が出た。

ハルがびくつと身をすくませる。

「……ごめん、ハル。ハルはなんにも悪くないのに」

「……いいよ。しゅーちゃんの気持ちも分かるし」

ハルの声を、半分聞き流す。

頭の中ぐるぐると、何も考えられない。

たぶん少し、落ち着いた方がいい。

このままだと、いい考えが浮かぶ前に、もっとひどいことをハルに言っちゃいそうだから。

部屋の中を、ぐるっと見回す。

東さんと駿くんは、さっきどこかに出かけてしまった。

だからこの家には、今はぼくとハルしかない。

ソファァー、クッション、テレビ、カーペット。

落ち着いた感じの、いここの良さそうな部屋。

テレビの上においてある、小さな写真立てが目についた。

来たときに電話のところで見かけたのとおんなじ、小さなセピア色の写真。

どこかで見たような気がする、さっき思った写真だ。

手に取ってみる。

古い工場と、前に並んだ……

……思い出した。

あれを見たのは、確か。

記憶が巻き戻っていく。

ハルと一緒に逃げた町。倉庫。にぎやかな通り。夜行列車。電気の消えたぼくの部屋。おじいちゃんの家。宿題。ラジオ体操。ハルと、はじめてあったとき。

昔のカメラの、使い終わったフィルムみたいに、記憶は音を立てて巻き戻って。

あるべきところにおさまって。

かちり、と音がした。

ハルの目の前に、きちんと座り直す。

「……ハル。ちょっと、お願いがあるんだけど」

「どしたの？ しゅーちゃん。急にあらたまって」

あわててハルも座り直した。

「あの人のうちにまで、行きたい。今すぐに、手紙をとどけに」
とたんに不機嫌になるハル。

「あんな目にあつたのに、まだおじいちゃんの言うこときくの？」

「そうじゃないよ。ちょっと、聞いてみたいことがあってさ」

「何を聞くのよ」まだとがったままの声で、ハル。

「今度の事件のこと」

「……あの人が、何か知ってるの？」意外そうな声。

「たぶん。この計画とはなにも関係ないだろうけど」

「どういうこと？」

不思議そうなハルに、ひとことだけ言う。

「わかった……かもしれない。ぜんぶ」

「わかった……って、こんどのこと？」

「うん。ほんとかどうかはまだわからないけど」

そしてぼくは、さっき思いついたことを残らずハルに話した。

長い時間をかけて、考え考え。

「え……だって、だってだって……」

今度の旅行に来てから、ハルの驚いた顔を見るのは、何度目だろう？

「でも、これだったら、どうしてこんなことになったのか、わかるでしょ？」

ぼくの言葉に、しぶしぶうなづくハル。

「……それなら、おじいちゃんのこととは、わかるような気がするよ。許してなんか、絶対にやらないけど」

「……でも。それ、ほんとなの？」

「わかんない」

ぼくの言葉に、ハルが不安そうな顔になる。

「でも、ぼくにはこれしか思いつかない。少なくとも、いまは。」

……だから、確かめに行きたい。いまから、すぐに」

「そんなことしなくても、あしたおとーさんたちといっしょにいけば、事情がわかるんじゃないかな？」

「……それじゃ、だめだよ。ぼくたちの聞きたいこと、たぶん聞けない」

出発の時のことを思い出す。

「たぶん、あの時と同じみたいに、『ぼくたちのため』に、父さん達は絶対に本当のことを言わないだろうと思うんだ。」

……そんなの、いやだよ。

どうして、こんなことになったのか。

だれが、こんなことしたのか。

そんなこともわからないままに、知らないうちに誰かの道具にされてさ。

光彦おじさんもおじいちゃんも父さん達も、みんなぼくたちのこと道具扱い。

それで、最後までほんとのことは教えてもらえない。

冗談じゃないよ。絶対にいやだ。

だから、ぼくとハルで、全部解いちゃいたい。

誰かに、誰かの都合がいいようなことを聞かされるんじゃない。こっちで全部解いちゃって、みんなに突きつけてさ。ほんとのこと、しゃべらなきゃいけないようにしようよ」

ぼくの言葉に、ハルはちよつと笑って、はつきりと頷いた。

「ごめんね、迷惑かけて」

「迷惑なんかじゃないよ！でも……」
心配そうな顔のハル。

「……しゅーちゃん、こわくないの？」

「怖いよ！もし違ってたらこわいし、本当だったらもっと怖い。でも……」

まだ言おうとするぼくを止めて、ハルが言う。

「……おまじない、してあげよっか？」

「おまじない？」

「うん。元気が出てくるおまじない」

「めずらしいね、ハルがそんなこと言うなんて」

ハルはあんまりそういうこと信じなかったと思ったけれど……

「いいから！」

びつくりするくらい強い声で、ハルが言う。

……こういうときは、逆らわない方がいい。

「で、どうすればいいの？」

「そのソファーに座って、ちょっと目をつぶって。ぜったい、開けちゃだめだよ！」

「うん。……これで、いいの？」

いわれたとおりに目をつぶって、じっと待つ。

なかなか、始まらない。

聞こえてくるのは、息を整えるハルの呼吸だけ。

がまんできなくなって、なにをするつもりなのかハルに聞こうとしたとき……

ぼくの唇に、小さくて柔らかい何かがおしあてられて、すぐに離れた。

それが何か気がつくのに、一瞬だけかった。

ハルの唇だ。

「……ハル！？」驚いて目を開けると、

「だめだよ、目開けちゃ」真っ赤な顔のハルが、恥ずかしそうに笑っていた。

「……元気出た？」

「え、でもそのちょっと……」

あんまりあわてて、声が出てこない。そんなぼくを見て笑ってから、ハルが話し出す。

「心配することないよ。」

おじいちゃんやお父さんやおじさんが何を考えて、どんなことをしたとしても。

わたしはずっと、しゅーちゃんのそばにいるから。なにがあっても、絶対にね」

まっすぐにぼくの目を見て。

「だいじょうぶ。いつだってしゅーちゃんは、わたしのそばにいてくれたでしょ？ 今日みたいに、大変なときはいつだって助けてくれる。だったら今度は、わたしが助けてあげる。」

しゅーちゃんが泣いたりしないように「

ゆっくりと、でもだれよりもしつかりと。

「いまのは、約束。ゆびきりのかわり」

真っ赤な顔のまま、ハルははつきりと言った。

「好きだよ、しゅーちゃん」

そこにいたハルは、いつもとなりにいる、あのハルで。けれど、いつものハルとはまるで違って。

だから、ちよつと横を向いて、

「ありがと」

とだけしか、言えなかった。

しばらく、そのままでいたあと。

「ねえ、しゅーちゃん。おねがいがあるんだけど……」小さな小さな声で、ハルが言う。

「なに？」

聞き返すと、ハルは真っ赤になって、

「わたしも、約束してほしい」

ハルのいった意味を、ちよつとだけ考えて。

「しゅーちゃんがいやならいいよ！ わたしが勝手にあんなことしただけだし」

あわてて両手を振るハルに、そんなことないよといいたくて。

でも、なんだか照れくさかったから、黙ったまま。

かちこちに固まった体を、なんとか動かして。

しばらく迷ってから、目を閉じて待っているハルに、同じおまじないをしてあげた。

第十七話 到着

「東さんに話は？」

「しないほうがいいと思う。話してもだいじょうぶだとは思っけど、もし違ったら、ね」

ちよつと申し訳なさそうなハルに、笑いかける。

「それに、もし東さんに頼んだら、あの運転を我慢しなきゃいけないだよ？」

ぼくの言葉に、ハルも笑った。

「荷物は置いていこう。荷物を持っていかなかったことがわかれば、戻ってくるつもりだってこと、信じてもらえと思う」

持ってくるものは、あの手紙だけ。

短い書き置きを残して。

「こうやって逃げ出すの、今度で何回目かな？」

「これで最後だよ。きつとね」

そういつて、ハルの手を握つて。

ぼくたちはまた、そつと家を出た。

人通りの少ない裏道から、大通りへ。

待ち伏せしている人はいない。

伏見さんの言うとおり何か手を打ったのか、それとも単純に見失っただけなのかわからないけど、ぼくらにはとても都合が良かった。地図を見て、案内板を見て、なんとかあたりをつけながら駅へと急ぐ。

人ごみを逆に走りながら、電車に。知らない駅から知らない駅へ。

人ごみの中は、まぎれこむにはちょうどよかった。

あたりの人もみんな、こっちに注意もせずに通り過ぎる。だれもいないみたいに。

知らない町の知らない場所で、知らない人に囲まれて。

ハルと二人きり。

ここにはこんなにひとがいるのに。

……なんだか、怖い。

ハルの手を少し強く握る。

ハルは、ちよつとだけ驚いて、すぐにぼくの手を握り返してきた。

何度も何度も乗り継いで、目当ての駅へ。

小さいけれどにぎやかな駅前で、地図を確認。

「どつちなのか？」

「うーんと……あっち」

細長くのびている商店街を、人のすくない方に。

「見張つてる人、いないよね」

「たぶんね。もうおじさんにぼくらを追いかけて回す理由はないはずだもん」

おじさん以外はどうかかわらなかったけれど、それでハルは安心してらしい。

「じゃ、いくよー！」

そういつて、どこまでも続く道をいきおいよく走りだして。

……迷った。

「三番目の角だから、ここだよ！」

「だってここで右に曲がつたんだから、その先は……」

商店街も終わり、あたりには大きなお屋敷が建ち並んでいる。

大きくて、ぼくらには塀しか見えない。

道がこんなに入り組んでるなんて思わなかった。

まっくらな通りのあちこちに、寂しくぼつんと街灯が立つ。

道行く人も、誰もいない。

「……やっぱり、怖いよ」

今度はハルが、ぼつりといった。

「……うん」

これまでは、ずっと追っかけられていたから。

こわいなんて思ってるひまがなかった。

ハルと手をつないで、必死になって逃げていれば、それでよかったけど、今は。

知らない町の真ん中に、ほうりだされて。

今ぼくたちがどこにいるのか、それさえもわからなくて。

……このまま、どこにもつかなかったら、どうしよう。

「こんど誰か通ったら、道を聞こう」

ハルに、そういつてみたけれど。

「いや！」

ハルは思い切り首を振った。

「もう誰にも、話なんか聞きたくないよ。どこの誰がなにするか、わかんないもん。平沢さんみたいな人がまたいたら、どうするの？」

ハルの言うことは、わからなくはなかったけど。

「でも、このままじゃ、いつまでもあの人のうちまでいけないよ？」

「それでも、いや」

がんこに首を振り続けるハル。

……しょうがない。

あきらめて、またハルの手を引いて、歩き出す。

だんだんと、ハルの歩きが遅くなってきた。

「だいじょうぶ？ 疲れた？」

返ってきたのは、

「しゅーちゃん、ねむい……」

緊張感を全部ふつとばすみたいな、ハルの声。

「もうちょつとがんばれよ。あとちょつとなんだからさ」

……ほんとかどうかは、ぼくも知らないけど。

「だいじょうぶ、へいきだよっ」

言葉だけは元気なままで、ハルが答える。

なるべくゆっくり、ハルが疲れないように歩く。

それでも、道はわからない。

同じところを、ぐるぐる回る。

見覚えのある屋敷の角を、三回目に回ったとき……

つないでいたハルの手から、ふんやりとちからがぬけた。

そのまま、地面に崩れ落ちる。

「ハル!？」

あわててかけよったぼくの目の前で。

すうすうとねいきをたてて。

気持ちよさそうに、ハルは眠っていた。

「おいハル、おきろっ!」

ぺちぺちとほっぺたをたたいてみる。

ゆずぶって、耳元で大声を上げて。

それでも、ハルは起きなかった。

……まったく。

「しょーがないなあ」

大げさにため息を付いて、ハルを背負う。

「今日、つかれたもんな……」

これは、ぼくのわがままだから。

これ以上ハルに無理させるわけにもいかない。

不思議と怖さはなくなっていた。

背中のハルの、幸せそうな寝息。

とりあえず、ハルだけは間違いないそばにいる。
それだけで、ずっと気持ちが楽になった。

「ハル、重いぞー……」

今考えたことがなんとなく照れくさくて、ひとりごとを言ってみる。

「重くなんかないもん……」

いきなり背中から声が聞こえてくる。

「おきてるなら……」

聞こえてくるのは、規則正しい寝息。

「寝言か……」

ひとつため息を付いて、またハルを背負い直す。

だんだん、足取りが重くなってきた。

考えてみれば、ぼくだって疲れてるはずなんだ。

でも、こんどは誰かに助けてもらうわけには行かない。

ぼくが言い出して、ハルまで巻き込んだことなんだから。

さいごまで、やらなくちゃ。

それから20分くらいたって、やっとぼくは目的地にたどり着いた。

時計を見る。

……もう十時か。

大きなお屋敷。

「仁科」と書かれた表札に目をやって。

くつつきそうになる目をなんとかこらえて、大きな門の前に立つ。

ハルをおぶったまま、玄関のチャイムを押す。

インターホンから、品の良さそうなおばあさんの声がした。

「はいもしもし。どちらさまでしょうか？」

「夜分遅くすいません。高月周哉といいます。後ろにいるのが、従

妹の遙です。

おじいちゃん……高月作蔵から手紙を預かってきました」

インターホンの向こうで、息をのむ気配がした。

「受け取りたくないかもしれないかもしれませんが、どうか受け取ってもらえないですか？ぼくたちも、そのことで聞きたいこと、いっぱいあるんです」

返事は聞こえない。

足が、がくがくする。

でも、これはぼくたちだけで、やらなきゃいけないことだから。だんだん、気が遠くなってきた。

それでもなんとか、残った力で言葉を続ける。

「お願いします。ほんとに、ごめんなさい。」

……おばあちゃん……」

ぼくが覚えているのは、そこまでだった。

第十八話 おはよう

休みの日はいつだって、ベッドのなかでごろごろしてる。
半分寝たまま、とろとろすこす。

とくに今は夏休みだ。学校のない日がずっと続く。

ということは、こんな幸せな日が毎日続くということだ。

けれど先生も、こんなぐうたらな毎日を生徒に送らせないように、
ちゃんと陰謀を巡らせている。

そしてその陰謀の手先の声が、

……聞こえてこない。

「……？」

まぶたを開ける。

いつもより、ずっと高くにある天井。

寝返りを打つ。

いつもみたいなベッドじゃなくて、大きなふとんの中。
畳に障子。

いつもと、ちがう部屋。

……あ、そっか。

きのうはあのまま倒れちゃって、それから……

（ハルは？）

ハルはどこに？

あわててまわりを見る。

ぼくのふとんのとなりに、なかよくならべられた大きなふとん。

ハルはそこにいた。

きもちよさそうに、すうすう寝息をたてている。

安心したら、急にいたずらしてやりたくなってきた。

……これは、チャンスかもしれない。ひごろのすいみんぼうがいのうらみを、いまこそはらしてやろう。

音をたてずに、そーっとハルの枕元に。

「……ううん」

なんにもしらずにねむっているハル。

……昨日されたみたいに鼻をつまんでやろうと、顔をのぞきこむ。
しあわせそうな顔。

……だめだ。ぼくには、できないや。

ハル、かわいすぎる。

「おはよ、ねぼすけさん」

僕が呼んでもハルはぼーとしたままで、ゆらゆらあたまをつごかしている。

しょうがない。

ハルの小さな耳をつまんで、

「起きろー！ーっ！ー！」

思いつきり叫ぶ。

とびおきたハルは、右を向いて、左向いて、もういちどくりかえしてからぼくに気づいた。

「……しゅーちゃん？」

「おはよ。ハル」

「なにするの！」

「ひとりでぐうぐう寝てるほうがわるいんだよ」

ここで様子がおかしいことに気づいたらしい。

「……ここ、どこ？」きよろきよろとあたりを見回しながら、ハル。
「仁科さんのおうちだよ。きのうハルが寝ちゃったあと、なんとかここまで運んできたんだ」

「ごめん……」

しゅんとなったハルを、からかつてみる。

「大変だったんだぞ。ここまでするずる引きずってきてさ」

「ええっ！」

自分の体をあちこち見回して、傷がないかどうか確かめるハル。

「うそうそ。ぼくも玄関前で倒れちゃったから、たぶん仁科さんが全部やってくれたんだよ」

「……倒れた？」ぼくの言葉に、ハルの目が光った。

……まずい。

「あ、えーと……」

「……無茶しちゃだめだよ、しゅーちゃん。私が寝ちゃったからだろうけど。しゅーちゃんが倒れちゃったら……」

そのまま、ハルもぼくもだまりこんだ。

「目が覚めたかしら？」

ふすまのむこうから、いきなり人の声がした。

あわてて正座をして、返事をする。

「あ、はい。おはようございます！」

ふすまを開けて、やさしそうなおばあさんが姿をみせた。

どこかで見たような顔。昨日聞いた声。

たぶん、このひとが仁科さんだろう。

「だいじょうぶだった？心配したのよ、いきなり玄関前で倒れてるから」

「すみません、ごめいわくおかけして」

ハルと一緒に頭を下げる。

「いいのよ、そんなこと気にしなくても」

そういつて、仁科さんは笑った。

「ごはんも用意したから。あんまりたいしたものはないけれど」

「すいません、ほんとうに」

もう一度頭を下げる。

「着替えはここに置いておくから。ごはんを食べ終わったら、おうちの人に連絡しなさいね」

それだけいって、仁科さんは部屋を出ていこうとした。

「……手紙は？」

ぼくのことばに、仁科さんは顔をくもらせた。

「あなた達には悪いけれど、手紙は受け取れないの。どうしてもね。せつかくここまで来てくれたのに、ごめんなさいね」
優しく、でもきっぱりと仁科さんは言った。

「……どうしてですか？」

「いろいろとね」

少し硬い声。

「おじいちゃんと、むかし何かあったからですか？」

仁科さんが何か言いかける前に、

「あの写真で、となりに写っていたひと。仁科さん、ですよね？」

「……あの写真って？」

「高月電機の昔の工場の前で、おじいちゃんと仲間のひとたちが写ってる写真です。あの写真の、たった一人の女の人。おじいちゃんのとりにいたの、仁科さんですよね？」
もう一度、聞いてみる。

しばらく、誰も何もしゃべらなかった。

「……おじいさんから、話を聞いたの？」

「いいえ。おじいちゃんは、手紙をとどけてほしいとしかいいませんでした」

ぼくの返事に、仁科さんはためいきをつく。

「そう……」

「ごめんなさい。たぶん、仁科さんには思い出したくないことなのかもしれません。」

けれど、ぼくたち、どうしてこんなことになったのか、知りたいん

です。

全部、話します。これまでにあったこと。

どうして、こんなことを考えついたかも。

ひょっとして、おじいちゃんの子供の話なんかききたくないかもしれないですけど、話だけでもきいてもらえませんか？」

ぼくのことばに、仁科さんは小さく、でもはつきりとうなずいてくれた。

第十九話 訳

着替えてごはんを食べてから、ぼくたちは仁科さんに今まであったことを話した。

仁科さんは、最後までしつかりと、ぼくたちの話を聞いてくれた。

「……それで、私に聞きたいことって？」

仁科さんが、ゆっくりと口を開く。

「そのまえに、ぼくがどうしても不思議だったこと。それから、話します。あとでつながってきますから」

ぼくの言葉に、うなずく仁科さん。

「最初から、不思議だったんです」

一度深呼吸してから、ぼくは話し出す。

「どうして、ぼくたちが手紙を持っていくことになったんでしょう？」

東さんの家で、考えたこと。

「もつと信用できる大人じゃなくて、わざわざぼくたちが手紙を持っていかなきゃならない理由。おじいちゃんが、そこまでして手紙を届けようと必死になる理由。おかしいことばかりです」

どうして。どうして。どうして。

たくさんの疑問。

「でも、それより、一番不思議だったことは……」

「ほんとだったら、こんな事件、ぼくとハルだけでなんとかするはずないんです」

ぼくのことばに、仁科さんが目を見開く。

「あいつらの計画にあちこち穴があったから。ぼくたちがピンチになるたびに、どこからか救いの手があったから。だから、ぼくらは

いまここにいます」

ちらつと、ハルの顔を見る。ハルが、小さくうなずく。

「でも、どうしてそんなに都合よく、みんな助けてくれたんでしょう？」

「おじいさんが手を回して助けてくれたんじゃないの？」と、仁科さん。

「だとしたら、さいしょからぼくたちをあぶないめにあわせないようにはしますよ。全部、仕組まれてたんです。ぼくらを誘拐して、『危ない目にあわせてからたすけだす』こと。この計画をたてたおじいちゃんには、それは絶対に必要だったんです」

「……どうして？」

「……こんどの事件で、いちばんあやしいうごきをしたの、誰だったと思います？」

テレビで見た名探偵みたいに、なるべくもったいつけてしゃべってみる。

「……わからないわ」

「じゃ、質問を変えます。あやしいひとが電車の中でついてきたとき。誘拐犯から逃げ出したとき。助けてくれたの、だれだったでしょう？」

「……東さん、だよね」

それまでだまっていたハルが、口を開く。

「うん。でも、どうして東さんだったんだろう？」

「？」

「一回目は、別に問題ないです。でも、二回目。町で助けてくれたのも東さんだったのは、どうしてなのでしょう？」

「列車で助けてくれたひとと町で助けてくれたひとがおなじひとでなきゃいけない理由なんか、ないです。」

そんなことをしても、ぼくらが不自然に思うだけですよ、いまみにいね。

おじいちゃんが、『ぼくらに知られないように』ぼくらを裏から見守っているのなら、二回目：誘拐されたときに助けてくれるのは別の人じゃなきゃだめなんです」

「おじいさんが、あなたたちに、わざと自分が関わっていることをばらそうとしたってこと？」

「いいえ。だったら、最初から隠そうとしません。

何か、理由があったんです。『東さんが』ぼくらを助けなければならなかった理由が」

すっかりぬるくなってしまった麦茶を、一気にのみほす。

「それに、誘拐犯から助け出すんですから、強そうな男の人のほうがよかったとおもうんです。なにがあるかわかりませんから。

でも、助けてくれたのは東さん。別に強くもないし、ふつうの女の人。

そのあとのことだって、変ですよ。

あんなことがあったら、ふつうはすぐに警察に届けると思うんです。だって、ふつうのひとの手におえないじゃないですか、誘拐事件なんて。

なのにうちに連れて行ってくれて、駿くんまで会わせてくれて。なんにもこわがってないんです。

面倒なことになんかなるはずがない。それがわかってないと、あんなことはしないと思いますよ」

一度言葉を切って、続ける。

「たぶん、知ってたと思います、東さん。この計画のこと。おじいちゃんに頼まれたんだとおもいます」

「……どうして、そんなことを？」

「会わせたかったんですよ、東さんと駿くん、ぼくたちを」

仁科さんは今度こそ、途方に暮れた顔をした。「どうして」と、顔に書いてある。

「ぼくらは、わかんなかったんです。東さんの家で、あの写真見るまでは」

仁科さんの顔が、はつきりとこわばった。

「古い工場の前で、おじいちゃんと仲間達が並んで笑ってる、セピア色の古い写真。」

あの写真、どこかで見たことがある、と思ったんです。どこで見たのか、それを思い出したときに、全部つながりました。

……あの写真、おじいちゃんの家にあったのと、同じだったんですね」

「おじいちゃん、あの写真毎日見てました。とくに最近、元気がなくなってるから。寂しそうな顔して、いつもいつも。」

たぶんあの写真に写ってるひと、すごくたいせつなひとだったんだとおもいますよ」

少しだけ、かおをそらす仁科さん。

「でも、その写真が、なんで東さんのところにもあるんでしょう？」

「あの写真に写ってるひとは、どうみても東さんじゃありません。それなのに飾ってあるということは、東さんにとってあの写真はとても大事なもののなんです。」

東さんにとって、とても大事なひとが写ってるんですよ。たぶん」

「おじいちゃんにも、東さんにも、おなじように大切なひと。」

だとしたら、東さんとおじいちゃんの間には、なにか関係があるんじゃないか、そうおもったんです。

で、そう思って写真を見ると、いくつか気がついたことがあって。

あの場所で、隣にいた女のひと。

ほかの人は会社の人で、全員男の人。

たった一人、見たことのない人。

おじいちゃんと仲がよくて、でもぼくが見たことがない人。

おじいちゃんが必死になるなら、東さんとつながりがあるなら、たぶんこのひとだ、と思ったんです。

あとは、そのひとと仁科さんを結びつけるのは、簡単でした」

「おじいさんが私のところに直接手紙を送ってこない理由には、ならないわよ？」落ち着いた声で、仁科さん。

「たぶんなにか理由があったんです。

確かに、手紙を渡すだけだったら、おじいちゃん本人がいけばいい。あれだけ必死になるくらいなんですから。

それなのに他の人に頼んで渡してもらおうということは、おじいちゃんが渡せない理由があるんだろうと。

ひょっとして、仁科さん断ったんじゃないですか？

手紙を受け取るの。

だからぼくらにたのんだ。

相手がこどもなら、何もきかずにおいかえすようなことはしないだろうと、おじいちゃんおもったんじゃないでしょうか？

「そこまでするのは、どうしてだとおもう？」

仁科さんは、穏やかに言った。

「もう、わかってるんでしょう？」

「はい。だからあのときああ呼んだんです、おばあちゃん、と。東さんのおばあちゃん。駿くんのひいおばあちゃん。

……おじいちゃんの、最初の奥さん。

血はつながっているかまではわからないけど、ぼくたちの、もうひとりのおばあちゃん」

第二十話 はじまりの前のはなし

「……もしわたしが違うと言ったら？」

かたい声で、仁科さんがつぶやく。

「違うんですか？」

ほんとにびっくりした顔で、ハル。

「……そう返されると、なんともいいにくいわね」

そういつて、苦笑いする仁科さん。

「そうすると、やっぱり？」

ぼくの言葉に、仁科さんはうなずいた。

「ええ。わたしは昔、おじいさん……作蔵さんと結婚していたことがあるの。」

聞きたかったことつて、このことでしょう？」

悲しそうな顔。

聞いてはいけないことだと、わかつてはいたけれど。

「……はい。ごめんなさい、こんなときいちゃって」

「いいのよ。ここまでわかってたなら、隠しても仕方がないし。」

……でも、どうしておじいさんといままで連絡をとらなかったのか。いまでも、連絡を取ろうとしないのか。そこまでは、さすがにわからなかったみたいね」

小さく笑う仁科さん。

「ごめんなさい。何か事情があるとは思いますが、そこまでは……」

「いいわ。わかるわけないんだから。話してあげる。あまり楽しい話にはならないかもしれないけれど」

そういつて、仁科さんはぽつりぽつりと話しはじめた。

「昔、腕のよい技術者だったおじいさんは、私と結婚したあと、小さな工場を建てて独立したの。」

おじいさんと仲間たちは毎日毎日機械をつくって、わたしはその世話と、事務一般をやって。

お金はなかったけれど、腕と夢はあったから。毎日が楽しかった。

そのうち腕が評判になって注文も増えて。赤ちゃんも産まれて。いつまでも、こんな日が続くと思ってた」

昔を懐かしむように、仁科さんは話し続ける。

「けれど、そのころ日本は大きな戦争をやっている。

おじいさんのところにも、戦争に来るようになっていう命令がきたの。わたしはいやだったけど、どうにもならない。

笑って送り出すしかなかった」

仁科さんは、淡々と話し続ける。

「それからしばらくして、南の島から電報が届いたの。

おじいちゃんが亡くなったってね」

「……!？」

一瞬、なにを言われたのか、わからなかった。

「……でも、おじいちゃん生きてるよ!」

「そうよね。でも、そのころはたまにあった話なの。もちろん、そのときはそんなこと知らなかったけれど」

「それで、どうしたの?」

「最初のうちは、それでもがんばってたんだけどね。

会社の方は残った人達が必死になって守ってくれてたし」

「でも、その時代、赤ちゃんをかかえて一人で生きていくのは大変だつて、みんな……とくに伏見さんが心配してくれたのね。

しばらくたってから、仁科さんを紹介されて、再婚したの。

工場のみんなも、祝福してくれた。

私は工場を離れて、伏見さんが中心になって会社を続けて。そのうちに、戦争も終わって。

それなりに幸せだった。あの日までは」

そういつて、溜息をつく。

「ある日、伏見さんから電話がかかってきて。『社長が帰ってきた』って。」

あわてて工場まで出かけて、作蔵さんが確かにそこにいることがわかって。

……出ていけなかった。

作蔵さんは、帰ってきてくれたのに。私は、あんな電報なんか信じて、ほかの人と再婚して。

会わせる顔がなかった。

そのまま、作蔵さんに見つからないように、そつと帰って。それから、ずっと会ってない」

仁科さんの手が、震えているのがわかる。

でも、ぼくもハルも、仁科さんに声をかけられなかった。

「おばあちゃんは、何にも悪くないよ」といえばよかったけれど。仁科さんは、そんなことはわかってる。

たぶんぼくらが生まれる前から、ずっとそのことで悩んできたんだ。ぼくたちがなにをいつても、何のなぐさめにもならない。

だから、仁科さんの話をだまって聞いていることしかできなかった。

「噂は、いろいろ聞いたの。作蔵さんが別の人と再婚して、子供ができたこと。」

とても仲のいい夫婦だったこともね。

こつちも、作蔵さんには申し訳なかったけれど仁科とはうまくいった。とても大切にしてくれたし」

「仁科さん……旦那さんのほうは？」

「……五年前になくなったわ。大往生……ね」

「……すいません」

「いいのよ。わかるわけではないしね」そういつて、軽く手を振る仁

科さん。

「そのあとも、娘と孫と曾孫…あなたたちに会った「東さん」と「駿君」ね…はいたし、今まで特に困ったことはなかったの。」

……今年のはじめ、急に作蔵さんから手紙が来るようになるまでは」

ここで一度、仁科さんは言葉を切った。

いや、言葉が続けられなくなったみたいだった。

少ししてから、また話し始める。

「何十年も連絡がなかったのに、急に手紙が届いて。」

……怖くなった。

何十年も昔の罪が、突然目の前に突きつけられたような気がして。

……思わず、捨てたの。

それから、何度も手紙も来だし、電話もかかってきたけれど。

全部、無視した。

おじいさんが、今になって私を責めようとしているような気がして」

「おじいちゃん、そんなことするひとじゃないよ!」

ハルの抗議に、仁科さんはゆっくりと首を振る。

「わかってるわ。でもね…どうしてもだめなの。いまさら、おじいさんの手紙は受け取れない。」

おじいさんは、ちゃんと生きて帰ってきてくれたのに。私は、待っていたらなかった。

いったい、いまさらどんな顔して、あの人に会えばいいの?」

そういった仁科さんの顔は、ぼくらよりも何十年も生きてきた、優しいおばあさんの顔と言うより、昨日迷子になったときのハルみたいな、途方に暮れた顔だった。

「……それは困るな」

ふいに、玄関の方から声がした。

「おじいちゃん?」

思わず声がそろってしまふ。

「おじいちゃん、具合悪かったんじゃないの？」

「……やっぱり、仮病だったんだ？」

ぼくの言葉におじいちゃんは苦笑いして、

「すまんかったな、心配させて」とだけ、いった。

それから、真っ青になった仁科さんに、優しく声をかける。

「悪かったな、こんな手の込んだことまでして」

その後ろから、やっぱりぼくたちの知った顔。

「ごめんねーふたりとも、びつくりさせちゃって」

「東さんに駿くんまで……」

駿くんを抱きながら、東さんが姿を見せた。

「……まず、私より先に謝る人がいるでしょう？」

仁科さんが、静かに言う。

おじいちゃんはずいずい、ぼくとハルに頭を下げた。

「悪かった。こんなことにまきこんで」

「ほんとにごめんね。高月さんがこんなことまで考えてとは思わなくて。ただおばあちゃんに手紙を渡しに来るだけだと思ってたから」

そういつて、東さんがおじいちゃんをにらむ。

「ちよっと、やりすぎですよ。たったこれだけのことのために……」

東さんの言葉に、おじいちゃんがうなだれた。

「なるべくおまえ達がひどい目に遭わないように、手を打ったつもりだったんだが……」

言葉を濁すおじいちゃん。

と、東さんが頭を下げた。

「すいません、知らなかったもので」

「いや、いい。伝えておかなかったわしが悪い」

そういつて、おじいちゃんも頭を下げる。

「……何の話？」

ぼくの言葉に、おじいちゃんと東さんは顔を見合わせて。

「あのね」いいにくそうに、東さんが切り出した。

「あの、電車の中の人のこと」

「……あの、ぼくらを追っかけてきた人だよね？」

「そう。あのね……」

「あのひと、しゅーくんたちを見張ってたのよ」

「……それが？」いいたいことが、よくわからない。

「……おじいちゃんの命令で、ね」

「……え？」思わず、ハルと声が重なってしまう。

「あのひとね。おじいさんがつけてくれた護衛のひとだったの」

ハルと顔を見合わせたぼくに、おじいちゃんが説明する。

「いくらなんでも、こんなあぶないことをおまえたただけにさせるわけにはいかないからな。何かあったときに、すぐに助けられるように護衛をつけておいたつもりだったんだが」

苦虫をかみつぶしたような顔で、おじいちゃんが言う。

「東さんには『怪しい人が付いてくるかもしれないから、注意しておいてくれ』とはいったんだが。まさか、護衛を追い払われるとは思わなかった」

「『ああ、この人が怪しい人だ！』と思っちゃって」

たっぷり十秒はたったあとで、ぼくはやっとの事で聞いた。

「……じゃ、あの人とおじいさんの関係は？」

「きれいさっぱり、なんにもなし！」

「……だから、ぼくたちのこと、見張ってたんだ……」

ハルと顔を見合わせて、笑い出す。

結局、なんてことない。

ぼくたちが自分でわざわざ危ないところへ飛びこんでただけだったんだ。

ぼくたちが笑い終わったあと、東さんが切り出した。

「ごめんね、おばあちゃん。おばあちゃん、ずっと気にしてるのは知ってたけれど、

……もうそろそろ、自分を許してあげても、いいと思うよ?」

「いいえ」

けれど仁科さんは、首を縦に振らなかった。

「どうして?これ以上、苦しまなくても……」

「そういうことじゃないの」

きちゃんと背筋を伸ばし、仁科さんは言った。

「作蔵さん。この子達に謝らなければならないのは、本当にそれだけですか?」

仁科さんの視線を浴びて、おじいちゃんが目をそらす。

「ハルちゃん達も、気が付いてるんでしょう? たったあれだけの証拠で、わたしたちのことに気が付いたんだものね」

うそは、つけなかった。

だまって首を縦に振る。いちどだけ。

「……やっぱり」

ぼくらの様子を見た仁科さんが、おじいちゃんに何か言いかける。けれど、ぼくの方が早かった。

「できるなら、あとで言おうと思ってただけけど。

……おじいちゃんには悪いけれど、やっぱり許せないよ」

「……周坊?」

となりでハルが、必死に首を振る。

ハルの言いたいことは、わかる。

いま、これを言うことは、たぶんだれのためにもならない。
でも、もうがまんできなかった。

「ぼくらを誘拐した、本当の理由。まだ、話してくれてないじゃない
」

第二十一話 裏

おじいちゃんは、表情を変えない。

ただだまって、ぼくらの方をみつめている。

もっいちど、くりかえす。

「だめだよ、おじいちゃん。」

どうして僕らを誘拐したのか、その説明が終ってないよ」
「ぼくのことばに、おじいちゃんは落ち着いて答える。」

「それはさつき、お前が言ったとおり……」

「だったら、僕らを誘拐しなくたっていいじゃない。」

別にそんなことしなくても、自然にぼくたちと東さんを会わせること、いくらでもできるでしょ？

なのにわざわざ誘拐なんておおげさなことさせてさ。

そんなことしたら、いくら護衛をつけてても、ぼくらがどんな目に遭わされるかわからないよ」

ハルが、心配そうにぼくのお腹を見る。

あいつらに蹴られたところ。今でもまだずきずき痛い。

おじいちゃんは、少しだけ顔を曇らせる。

それがぼくを心配してなのか、それとも自分の計画がうまくいかなかったことにたいしてなのかは、わからなかったけど。

「おじいちゃん。僕らを誘拐させた、本当の理由は何？」

おじいちゃんは答ええない。少し、唇をかんでいる。

しばらく待ったけど答えが返ってこなかったから、あきらめて話を進める。

「話してくれないなら、ぼくが考えたことを言うよ。絶対にこうだとはいいないけれど、あまりおかしいことは言っていないと思う」

間違ってくれていたら、とは、何度も思ってたけれど。

「おじいちゃん、ぼくたちを囿にしたでしょ。裏切り者を見つけるために。自分に逆らうひとを、見つけたすために」

東さんが驚いた顔をした。

仁科さんは、厳しい顔をしてうなづく。

「どういうこと？」わけがわからないといった顔で、東さんが聞いてきた。

「おじいちゃん、自分に逆らうひとを見つけたかったんだよ。

裏切り者を見つげるために、ぼくらをわざと危ない目に遭わせたんだ」

「どうしてそうなるの？」納得できない様子で、東さん。

「さいしょから、かんがえてみようよ」

そうして、ぼくは自分の推理を話し始めた。

「まず、ぼくらの旅行の予定表。あれを知ってるのは、ぼくたちと父さん達とおじいちゃんだけのはず。

なのにおじいさんはそのことを知っていた。

おじいさんに教えたのは、おじいちゃんしかない。ここまでは、いいよね」

ぼくの言葉に、仁科さんがうなづく。

「……けど、教えたのはおじいさんだけなのかな？」

東さんが不思議そうな顔をした。

「そんなことはないと思う。たぶんおじいちゃんは、『うちの孫に充分気をつけてやって欲しい』とかいって、会社のえらい人たちみんなにぼくらの予定表を配ったかもしれないって、思ってる」ハルが顔を上げた。

「これはあとで会社の人に聞いてみればわかると思う。べつにそれ自体は悪いことじゃないから、すぐに教えてくれると思うよ」

「どうして、そんなことをしたと考えたのかね？」

おじいちゃんは、まだ落ち着いている。

「もしねらいがおじさんだけだったら、ここまで大げさなことしなくてもいいんだよ。」

ぼくらを誘拐なんかさせなくても、いくらでも方法はあると思うんだ。

……でも、ぼくらを誘拐しようとするのが、だれだかわかんなかったら？」

「！？」

「誰が誘拐するのか。誰があの手紙をぼくらを誘拐してまでほしがるのか。誰が、おじいちゃんに刃向かおうとするのか。それが、わかんなかったら？」

でも、誰が刃向かうのか、それを見つけたいのなら……」

「わざと手紙をわたしたちに預けるんだね。それで、そのことを裏切りそうな人全員に教えて、誰が手を出すのか、じっと見てるの」

ハルの言葉に、うなずいてみせる。

「そう考えれば、あそこまで大がかりなことをする理由が説明付くの。おじさんの他にもあやしいひとがいて、うまくいったらそのひとたちを全部片づけることができる、そのつもりだったんだ」

「ぼくらを誘拐するのは、おじさんじゃなくても別にいい。誰か裏切り者を捕まえることができるなら、おじいちゃんはそれでよかったんだ」

話しながら、ちらつとおじいちゃんの方を見る。

この話が始まってから、おじいちゃんはほとんど表情を変えていない。ときどき眉を上げたりするだけで、黙ったままじつとぼくの話

を聞いている。

それがどういう意味なのかはわからないけれど。

「準備が整ったところで、おじいちゃんが倒れたふりをする。病院の院長さんかなんかに頼んでね。

それで入院して、まわりのひとにおじいちゃんがもう長くないと思
い込ませる。

おとうさんたちもわざわざ呼び付けて、そのことを知らせたんだ。
それで、ぼくたちだけはそのままにしておいて。

おじいちゃん、ぼくらのことあのとき呼んだ？」

「いいや。まだおまえたちには早いとおもったからな」

「じゃ、ぼくたちの旅行は止めたの？」

「そんなことはせんよ。お前たち、あの旅行をほんとうに楽しみに
していたからな」

「おじさんたちにも、そういつたの？」

「ああ」

「……いつたのは、それだけ？」

ぼくの質問に、おじいちゃんはちよつと黙つて。

それからぼそぼそとはなした。

「大事な手紙をあずけてあるから、いまさらとめるわけにはいかな
い、とは言つた」

「やつぱり。親戚みんなが集まつて大騒ぎの時に、ぼくたちだけ『
大事な用』で席を外してたんだ。

危篤のはずのおじいちゃんが、それでも止めなかった大事な用で」

「おじさん達にしてみれば、大事な用つてなんだろうと思う。それ
だけだったら不思議に思うだけだっただろうけど、おじさんはもつ
と大事なことを知っていた」

「……わたしのことね」仁科さんが、つぶやいた。

「そう。おじいちゃんが死ぬ前に、どうしても渡したい手紙。それはたぶん、遺産とかその関係のことなんだと、おじさんは思いこんだ」

「それで、誘拐になるわけね……」東さんがうなる。

「もちろん、『大事な手紙』というだけじゃだれも動かないよ。自分たちだってへたに動けば危ないもん。自分たちにも関わってくることだと、思いこませたんだろうね、おじいちゃんは。そうじゃない、罠にならないもん」

みんなが納得するのを待って、話を続ける。

「こうすれば、とりあえず父さん達は僕らの旅行を止めるよ。たとえ『大事な用』とやらがあつたとしても、それよりおじいちゃんの病気の方が大事だからね。」

そして、父さん達はぼくらに旅行を止めた理由をいえない。

『おじいちゃんが倒れて、ひょっとしたら死ぬかもしれない』なんて、そう簡単にぼくたちに言うわけに行かないもんね。

当然、ぼくらは納得しない。ぼくとハルの性格なら、たぶん何とかして抜け出して旅行に行く。

父さん達が止めなきゃ止めないで、なんの問題もない。

おじいちゃん、そこまで計算してたんだ」

「予想通りにぼくらが抜け出したあと、おじいちゃんはお父さん達に連絡を取ったんだ。」

『ぼくらを旅行に行かせてやれ』と。たぶん、ほんとうの理由は言わないままで。

ほんとの理由を言ったら、いくら父さん達でもうんていうわけないもん。

何とかして説得したんだ。

だからぼくたちのところに電話がかかってこなかった。

とりあえず父さん達に探す気がなかったから」

「おまえ達がいつ頃抜け出すかなんて、どうしてわかるんだね？」

おじいちゃんに聞かれた。声はまだ落ち着いたままだ。

「だって切符はもう買ってあるんだもん。東京行きの夜行列車の時間なんか、すぐにわかるよ。何本もあるわけじゃないんだから。

それに間に合うようにぼくらは出ていかなきゃいけないんだから、だいたいの時間は予想がつくと思うよ」

「それで、そのあと。たぶん駅あたりに護衛の人が先回りしてて、

ぼくらを見張るために電車に乗り込んだ。

ぼくらに付いてくる怪しいひとを見張るためにね」

「ちよつと待つて」東さんが話を止めた。

「最初から誘拐するつもりだったら、どうしておじいさんはハルちゃん達に護衛をつけたの？」

おじいちゃんも、ハルまでうなずいた。

「とめるつもりなかったんだよ」あつさり、ぼくは言った。

「『護衛』なんていうから、わかんなくなるんだ。『見張り役』で、いいんだよ。ぼくらを見張る人。

……ぼくらが、誘拐されるのを、見張る人」
「！」

「ぼくらに誰が手を出すのか。その証拠をしつかりつかんで報告するのが、あの人の役目。

……だから、あそこでぼくらがあの一とをまいちゃっても、そんなに困らなかった。

あの人もぼくらの予定は知ってるんだから、適当に網を張って待つていればいいんだよ。

……東さん」

「なに？」

「ぼくたちがいる場所、誰に教えてもらったの？」

「……おじいさん」あきらめたように、口を開く東さん。

「だよ。ほかにいないもんね、教えられる人。」

おじいちゃんがそのときぼくらの正確な位置を教えられたのは、護衛の人がすっかり仕事をしたからだよ。ちゃんと、見てたんだ。ぼくらが誘拐されるところまで」

声が強くなるのが、自分でもわかった。

「はなし、つづけるよ」

二、三度深呼吸して、もう一度話し出す。

「東さん、ぼくらの乗っている位置ははじめからしってたんだよね？」

「ええ」

「そこで護衛の人と鉢合わせして、あの人追っ払って。そして、ぼくらが誘拐される。」

けれど、ぼくらが捕まってる場所は最初からわかってた。たぶん、だれが裏切り者なのか、ある程度目星が付いてたんだと思う。犯人が誰だかわかんなかったら、もう少し手間取ってるはずだよ。あやしいところ、あちこち探さなきゃいけなくなるから」

「ほんと、あの護衛の人が様子を見て助けだしてくれるはずだったんだと思う。」

助けてくれたあとで、自然な形で東さんに会わせればいいんだし。

それで、外ですっと待ってた。チャンスが来るのを」

「どうしてそこで、しゅーくんたちを助けに行かなかったの？」東さんの声がした。かなり怒ってる。

「たぶんだけど、おじさんと誘拐犯の間につながりがあるっていう、決定的な証拠が欲しかったんだと思う。平沢さんが来るのを待ってたんじゃないかな？」

平沢さんの役割は『ぼくらを誘拐犯から無事に助け出して、おじさんのところにつれていく』ことなんだから、平沢さんがぼくらを殴

ったりすることは絶対にないよ。

だから、ここまできたらそんなに無理しなくてもいい。ぼくらの無事を確認してから、チャンスを待てばいいんだ。助けられないなら、それはそれ。証拠は握ってるんだから、あとからおじさんをこつてりと絞つてやればいい。

けれど実際には、ぼくらは平沢さんの嘘を見抜いて、しかもあの倉庫から自力で抜け出しちゃった。

だからおじいちゃんは焦つて、東さんを直接助けに行かせることにした。

護衛の人がだいたいの位置を教えて、あとは騒ぎの起こつてるところを探せば、ぼくらはみつかる。

あとは、もう話す必要はないよね」

ぼくが話し終わると、あたりはしーんとした。

だいぶたつてから、

「……どうして、そこまでして……」

東さんが、小さくつぶやく。

「うん。ぼくも、それが聞きたい。

わかんないことは、あとひとつだけだよ。

……どうして、おじいちゃん、こんなことしたの？」

なにもいわない、表情も変えないおじいちゃん。

それをみたたん、これまで思っていたことが、一気にあふれ出た。「仁科さんへの手紙？それはたしかにだいじなものだったんだろうけど、それよりもおじいちゃんは自分に逆らうひとを見つけることを選んだんだ。

もつと大騒ぎにならない方法だつて、探せばあるはずなのにさ。わざわざ一番大きな騒ぎを起こして。

たったあれだけのこのために、ハルをあんな目に遭わせて、仁

科さんや東さんにこれだけ迷惑かけてさ。

おじいちゃんにとって、ぼくもハルも仁科さんも、東さんも駿くんも、父さんやおじさん達まで。

みんな、ただの道具だったんだ。

……みんなをおもちやにして、遊んでたの？

おじいちゃんさえよければ、それでいいの？

ひとがおじいちゃんの思い通りに動くのって、そんなに楽しかった！？」

黙ったままのおじいちゃんに、胸の奥からあふれ出てきた言葉をぶつけて。

「なんとか言ってよ、おじいちゃん！」

ありったけの声で、ぼくは叫んだ。

第二十二話 裏の裏

それでも、おじいちゃんは何にも言わなかった。

ただうつむいて、何かを我慢しているみたいだ。

それがまた、ぼくを怒らせた。

もっと何か言ってやろうとして、となりのハルを見て。

言葉が、出なくなった。

ハルのようすが、変だったから。

小さな肩をふるわせて、じっとおじいちゃんを見つめている。

目の前のおじいちゃんと同じに、何かを我慢して、口に出せずにいるような。口を開いたら、何か大事なものをなくしてしまいそうな、そんな雰囲気だ。

「ハル？どうしたの？なんかへんだよ？」

なるべくハルをこわがらせないように、優しく聞いてみる。

その時、ハルがつぶやいた。

目に涙をいっぱいためながら、小さな小さな声で。

「おじいちゃん、死んじゃだよう……」

ハルのいったことばの意味が、わからなかった。

「どういうこと？」

「わかんないの、しゅーちゃん？」

おじいちゃんが、ここまであせってことをすすめるわけ」

僕からの返事がないことを確認して、ハルが続ける。

「おじいちゃん、ここまで無茶なことをするひとじゃなかったはずだよ？」

……確かに。

「わたしたちを旅行に行かせるときだって、『旅行に行かせなさい

「！なんていわなかったでしょ？」

「ぼくも、うなずく。」

「無理に旅行に行かせようなんて、させなかったよね。……ああいわれたら父さんが断れないことぐらいは、わかってたと思うけど」「そう。おじいちゃんのやることは、いつでもそうなの。大事なことをさせたいときでも、できるだけ無理をしないように、みんなが納得するようにやっていくの」

「おじいちゃんから手紙を渡されたときだって、そうだね。『これを持っていきなさい！』なんて、一言も言われなかった。ぼくらにきちんと頼んで、ついでにおこづかいの話もした」

小さくうなずいたハルが、続ける。

「それなのに、こんどだけ、なんだか別のひとみたいに強引にやってる。」

『とつても大事な手紙』をわたしたちに預けて、誰か裏切りそうな人にわたしたちを誘拐させて、裏切った証拠をつかんでからわたしたちを助け出す。それも、東さんに助け出させて、わたしたちの『いとこ』と会わせるようにする」

『いとこ』といったとき、ハルの顔がすこし…妙な顔になった。

『いとこ』なんてことばを、あんな年上の人に使うのが、ちよっとひっかかったみたいだ。

「こんな綱渡りみたいなこと、いつものおじいちゃんとは絶対にやらない。ひとつ間違ったら、大変なことになるし。」

おじさんや邪魔な人を追い払いたいなら、もっと時間をかけて、確実に慎重にじっくりとやっていくとおもう。その方が安全だし。それなのに、おじいちゃんはあることをした。

……おじいちゃんが焦る理由があったの。

「ここまででは、いいよね？」

ぼくがうなずくのを見て、ハルは続けた。

「普通なら、ゆっくり時間をかけて、問題を解決したはず。なのにここまで焦ったのは、

……かける時間が、もうおじいちゃんには残ってなかったから。こう考えるのが、一番普通なんじゃないかなあ？」

ハルの言ったことを、考えてみる。

ぼくらが行ったとき、ベッドで寝ていたおじいちゃん。

「おじいちゃんがたおれたときも、みんなすぐにあつまつたよね。ただ倒れただけだったら、あそこまですぐには集まらない。みんな仕事で忙しいし。」

それなのに、ぼくら以外はほとんど集まったんだよね？」

「みんな、おじいちゃんが倒れることを予想してたから、すぐにあつまれたんだと思う」

ハルにうなずいて見せて、続ける。

「おじいちゃんが仮病だってぼくは思ってたけど、本当の病気でも別におかしなことはない。ほんとうに、おじいちゃんは……」

もうすぐ死んじゃうのかも知れない、とは、どうしてもいえなかった。

「倒れたのは嘘かも知れないけど、その……悪い病気なのは間違いないと思う。」

このままだと、危ないってことも」

東さんが、質問してきた。

「おじいさんが危ないって言うけど、いまここにおじいさんいるじゃない」

「もうすぐ死ぬのと危篤なのは違うんじゃないかなあ。おじいちゃんはまだ死んじゃうのかもしれないけど、今はまだ元気に歩ける。そういうことだと思う」

ハルの言葉に、東さんは黙り込んだ。

「つまり、こういうこと？」

ハルの言ったことを、自分なりにまとめてみる。

「おじいちゃんは、自分がもうすぐ死ぬことがわかった。死んでしまうのは仕方ない。」

だから、死ぬ前に、どうしても心残りなことを、まとめてやってしまおうと思ったんだ」

ぼくのことばに、ハルは悲しそうな顔で、でもはっきりとうなずいた。

「仁科さんに謝ることと、自分に逆らうひとを見つけること……」

「ううん。違うよ」

ハルの言葉に、首を振る。

「おじいちゃんが心配だったことは、確かにふたつ。ひとつは仁科さんのこと。」

でももうひとつは、おじいちゃんに逆らう人たちをみつけることなんじゃないよ」

「どうして？」

「もうすぐおじいちゃんが死んじゃうんなら、そこまで無理して逆らうひとを見つけないでもいいんだ、ほんとは。どうせおじいちゃんが死んだあとのことなんだから」

「じゃ、どうしてこんなことしたの？」

「おじいちゃんが心配してたのは、ぼくたちのこと」

「わたしたちのこと？」

ハルが不思議そうな顔をした。

「うん。おじいちゃんは会社の経営から手を引いたけど、株とかはそのままだし、財産だってあるよね？」

それを狙って、だれがどんな風に動くかわかんない。

おじいちゃんが死んだあと、そんなトラブルに僕らが巻き込まれるのを、止めようとしたんだよ」

「もうおこったじゃない、トラブル！」

「うん。今、起こった。ほんとだったら、おじいちゃんが死んでからのトラブルのはずなのに」

「……？」

ハルが、ちよつと首を傾げる。

「おじいちゃんが、わざわざ今トラブルを起こす理由は、ひとつ。

……いつかは起きるトラブルから、できるだけぼくたちを守ること」

納得できてないハルに、なるべくわかりやすく説明してみる。

「去年の日本脳炎の注射のことは覚えてる？」

「ぼくの言葉に、ハルが顔をしかめた。

「ああ、あの痛いやつ」

「ハル、注射嫌いだったよね」

思い切り大きくうなづくハル。

「ほんと、どうしてあんなことしなくちゃいけないんだろうね？」

「なんでだともう？」

聞き返したばかりに、ハルはきょとんとした顔で、

「なんでって……病気になるように……」

「うん。多少痛くても、病気になるよりはずつとましだから。

……今度のことも、それと一緒になんじゃないかな？」

「あんなひどい目にあつたのに!？」

叫ぶハルに、できるだけ落ち着いた声で答える。

「でも、あれだけですんだ」

「？」

「おじいちゃんがあちこちに手を回してたから、あれだけですんだんだ。」

思い出して、ハル。確かにぼくらを誘拐させたのもおじいちゃんだけど、東さんにぼくらを助けさせたのも、やっぱりおじいちゃんなんだ。

おじいちゃん、ぼくらがあまりひどい目に遭わないように、いろいろと手を打ってくれてた。

おじいちゃんがいなくなってから何か事件が起きたら、あんなもんじゃすまないよ。

でも、今だったら、おじいちゃんの力で事件を押さえ込むことができる。

おじいちゃんの目が届くうちに、取り返しのつかないことにならないうちに、わざと事件を起こさせたんだ。

今事件を起こさせれば、それほど被害も出ないままおわるから。

おじさんやおじさんに協力した人たちは、今度の事件を起こしたことで動きがとれなくなるだろうし、罰もあると思う。そうすればおじいちゃんが死んだあと、ぼくらがトラブルに巻き込まれることもなくなる。

そういつつもりだったんだ」

「それだけだったら、わたしたちをわざわざおとりなんかに使わなくても、もっと確実に安全なやりかた、あるんじゃない？」

ハルが首を傾げる。

「そしたら、東さんや駿君にぼくらを会わせられないじゃない」

「べつに、東さんに会わせるためだけなら……」

「さっき言ったじゃない、ハル。おじいちゃんには、もう時間がなかったって。」

仁科さんに、確実に手紙を届ける方法。ぼくたちを、自分が死んだあとのトラブルから守る方法。ぼくたちを、東さんや駿くんに会わせる方法。これだけのことを、ひとつひとつ解決していく時間は、もう残ってなかったんだ。

ほんのちよつとしか残ってない時間で、心配事を全部片づけちゃ

うには、乱暴でも一度にまとめて事件を起こしちゃうしかなかったんだ……」

ぼくの説明で、みんなが黙った。

ぼくのいったことを、ずっと考えているらしい。

まだ黙ったままのおじいちゃんの顔を、じつとみつめる。

さっきはあいつたけど、あの推理は当たって欲しくなかった。

「そんなことない」といって、笑い飛ばして欲しかった。

けれど、おじいちゃんはまだまってうつむいたままだ。

そのとき。

「……わかりました」

静かに、仁科さんが口を開いた。

さっきまでと同じ、落ち着いた優しい声。

だから、仁科さんが言った言葉が、一瞬わからなかった。

「ハルちゃん達の言っていることは、本当なんですね」

「どうしてわかるの？」

不思議そうな顔をしたハルに、仁科さんは優しく言った。

「作蔵さんのことぐらいわかるわよ。一度は結婚してたんだしね」

「だったら、おじいさんと……」東さんが言いかけたけど、

「それでも、だめですよ」

静かに首を振る仁科さん。

「どうして？」

「これはもともと、おじいさんが悪いわけじゃないもの。

悪いのは、私。

『おじいさんが亡くなった』なんて話を信じて、別の人と結婚なんかしてしまって。」

おじいさんに会わせる顔がないの。

おじいさんに謝られるようなことじゃない。

わたしは、おじいさんの前にいる資格は、ないの」

寂しそうに、でもはつきりと仁科さんは言った。

おじいちゃんは何か言いかけて、口を閉ざす。

仁科さんの言葉には、それくらい重みがあった。

そういう仁科さんの手が、かたく握りしめられていることに、でもぼくは気づいた。

おじいちゃんには手が見えないようにしていたけれど、ぼくやハルの頭の位置ならよく見える。

仁科さんがそんなことを言いたいんじゃないくらい、ぼくにもわかった。

ほんとは、おじいちゃんと仲直りしたいことぐらい。

けれどそれが簡単にできないことも、同じくらいよくわかった。

わかりたくなんてなかったけれど。

仁科さんも、おじいちゃんも、ぼくもハルも。

言いたいことはいくつもあるのに。

相手のことを考えて、自分のしてしまったことを考えて。

結局だれも、しゃべれない。

ただ黙って、相手の顔を見続けるしかない。

いまやらないといけないことは、そんなことじゃないはずなのに。

第二十三話 手と手と手

「……ねえ、しゅーちゃん」

黙ったままのみんなを見ながら、ハルがささやく。

「これからやることに、びっくりしたりしないでね」

「？」

「いい？」

「……うん」

なんだかわからなかったけど、とりあえずうなずく。

「だいじょうぶ。わたしにまかせて」

そういつて、ハルが笑う。

いつもの、自信があるときの笑い方。

こっちもつられて、少しだけ笑う。

目の前では、あいかわらず黙ったまま、おじいちゃんと仁科さんがにらみ合っている。

怖くなるくらいの静けさの中で、

「しゅーちゃん！」

ハルの叫び声が響きわたった。

みんなの視線が一斉に集まる。

そうして、ハルは。

思い切りぼくを抱きしめて。

今度はみんなの目の前で、もっいちど。

あのおまじないをしてくれた。

目の前には、ハルの恥ずかしそうな顔。それはびっくりしたけれど、約束だったから。なるべく平気な顔して、こっちもハルを抱きしめる。

みんな、動かなかった。

おじいちゃんも仁科さんも東さんも、こっちをみて呆然としてる。あっけにとられるみんなの前で、

「だいいじなものなんでしょ？」

ちよつと赤くなった顔で、ハルが言う。

「ほしいものはほしいって言わないと、なくしちゃってもしらないよ」

ぴつたりとぼくに体を寄せて、ハルは続けた。

「……わたしね、しゅーちゃんと誘拐されたときに、思ったの。

いまここでしゅーちゃんがなくなったら。しゅーちゃんがけがしたり、どこか遠くに行っちゃったりして。

そんなの、絶対嫌だって。

わたし、しゅーちゃんはほしいもん。

どんなことしても、ぜったいに。

なくしたくないって、思ったの」

ぼくの体に回された手に、力が入る。

「おじいちゃんと仁科さんは、どうなの？」

おじいちゃん、いなくなっちゃうかもしれないんだよ？」

ハルの言葉で、二人とも少しだけ、意地をはるのをやめたらしい。にらみあつのをやめて、おちつかなげに目を伏せる。

……そっか。

だからハル、いきなりこんなことしたんだ。

いきなりこんなことすれば、おじいちゃんと仁科さんは絶対びつくりする。

それはもう、ものすごく。

たぶん、今にらみ合ってることも忘れてしまっくらいに。

ぼくたちが普通におじいちゃん達を説得しても、たぶん言うことなんか聞いてくれない。

こんな子供に言われなくなつて、ほんとはどうすればいいのかくらい、二人ともわかつてるだろうし。

けど、おじいちゃんも仁科さんも、ぼくたちよりもずっと長く生きていて、そのぶんいろいろなものを背負ってる。

そのために、動けない。

だったら、ぼくらのやらなきゃいけないことは？

決まってる。

どうすればいいのかなんて、大人のきちんとした意見じゃなくて。

「こども」としての、意見。おじいちゃんたちに見えていない、素直な気持ち。

それしか聞いてくれないのは、悔しいけれど。

……だから、二人が素直にぼくらの話をちゃんと聞いてくれるように、一度頭を真つ白にさせなくちゃいけなかったんだ。

おじいちゃんと仁科さんが、落ち着いて話し合いができるように。

やっぱり、ハルにはかなわないや。

いつだって、正解を知ってる。

少しだけ、間が空いて。

「おまえたちが聡い子だと言うことを忘れていたよ」
ぼつり、と、おじいちゃんはずばやく。

この間病気で倒れていたときより、もつともつと小さく見えた。

「まさか、わしのことまで見抜くとはな……」

さつきまでずっと黙っていた、質問の答え。

「……やっぱり、ほんとなんだ？」

ぼくの声に、おじいちゃんがうなずく。

「さすがにおまえ達に言うわけには行かなかったしな。もう少し時期を待つつもりだったんだが」

その「時期」っていうのは、たぶんおじいちゃんが死んだあとだったんだろうと、なんとなく思った。

「おじいちゃん、死んじゃだよ……」

泣き出しそうなハルに、おじいちゃんは優しく言う。

「なに、そんなに悪い人生でもなかったさ。会社は成功したし、自慢の孫たちもいる。」

孫が三人、ひ孫が一人。それだけでできれば、十分だよ」

どこか悟ってしまったような声。

聞くのが辛くなって、話題を変える。

「ひ孫って、駿くんだよな？東さんが、ぼくらのいとこ。という」とは……駿くんとぼくたちって、なんになるのかな？」

ぼくの質問に、みんなで首をひねる。

「いとこの息子……って、なんていうんだろう？」

「いとこでいいよ。わかんないから」

あっさりとハルが言った。

「そんなことより、仁科さんはどうするの？」

「そうだよ。二人とも、いったい……」

仁科さんとおじいちゃんがゆっくりと目を合わせる。

「……しかし、いいのか？わしは、おまえたちにあんなことを……」
辛そうなおじいちゃんに、ハルが厳しい声で言う。

「よくないよ。しゅーちゃんやわたしに、あんなことするなんて。みんなにも、あれだけ迷惑かけてさ。絶対に、許せないよ」
その言葉に、おじいちゃんがうつむく。

それをみてから、まだ怒った顔のままで、ハルは続けた。

「……でも、しゅーちゃん休ませてあげたいし。ちゃんと、『逃げない』って約束してくれるなら。一日二日だったら、待ってあげないこともないよ」

おじいちゃんが、目を一瞬丸くして。

それから、大きな声で笑い出した。

『逃げない』というのが、ぼくらのことからだけじゃないことに、たぶん気がついたから。

笑っているおじいちゃんを横目で見ながら、ぼくは仁科さんに向かって、話しかける。

「おばあちゃん……ぼくらのおばあちゃんですけど、おじいちゃんとはほんとに仲が良かったです。おじいちゃんも、おばあちゃんが亡くなってから、すっごく落ち込んで。会社も辞めちゃって、ずっと一人だったんです。」

……でも、仁科さんの写真は、ずっと大切に持っていました」

ハルがとなりで、大きくうなづく。

「けれど、長い間ずっと連絡しなかった。ぼくらのおばあちゃんに、遠慮してたんだと思います。それなのに、今になって仁科さんと連絡を取ったんです。」

……忘れられなかったんだと、思います。

ぼくらが言うことじゃないと思うんですけど。

……だから……」

「気にしなくても、いいと思います。おばあちゃんのこととは」
ハルが続きを言うてくれた。

黙ったままの仁科さんに、みんなの視線が集まる。

ぼくも、ハルも、おじいちゃんも東さんも。

じっと、仁科さんを見つめる。

しばらくしてから。

仁科さんも、小さく、こつくりとうなずいて。

おじいちゃんに歩み寄って。

ゆつくりと、抱き合った。

くつついたままのハルのからだから、力が抜けていくのがわかった。

たぶん、ぼくのからだからも。

……よかった。これで、たぶんみんなうまくいく。

東さんが、明るい声で言った。

「ほらほら、ここからは大人の時間。

おじいちゃんとおばあちゃんも、さっきのしゅーくんとハルちゃんみたいなこと、したいんだって」

『はーい！』声そろえて、わざと思いつきり元気に答える。
仁科さんとおじいちゃんは、そろって顔を赤らめて、うつむいた。

東さんについて、部屋を出ていく途中で。

まだ聞きたいことがあるのに、気がついた。

「仁科さん……」

いいかけて、途中で言葉をかえる。

「……おばあちゃん」

仁科さんが、目を丸くした。

「これから、おじいちゃんとおばあちゃんがどうなるか、わかんないですけど。

……もし、おばあちゃんがおじいちゃんと仲直りできなくても、

駿君のところに遊びに行っても、いいですか？」

おばあちゃんが、何か答えるより早く。

「ねーたん」

駿君の声がした。

東さんの胸元に抱きかかえられて。

はしゃぎながら、ゆっくりとぼくらに手を伸ばす。

ぼくとハルは、顔を見合わせて。

それからそつと手をつないで、

その手で、駿君の小さな手をしっかりと握りしめた。

もう一人の「いとこ」の手を。

エピソード

「しゅーちゃん、お手紙きたよー」

夏休みもあと一週間になったある日。

ハルが白い封筒をもって、窓から部屋にやってきた。

「誰から？」

「おじいちゃんとおばあちゃん！」

結局あれから、すぐに父さんたちが迎えに来てくれた。

ハルは怒られて、ぼくは殴られた。

「ハルちゃんを危ない目にあわせたから」だそうだ。

おじさんはこつてり油を絞られて、ずいぶんおとなしくなったみたいだ。

おじさんに協力した何人かの重役も、同じ目にあつたらしい。

仁科さんとおじいちゃんは結局仲直りして、最近はおじいちゃんが向こうに行くようになった。

おじいちゃんは少しずつ元気がなくなってきたらしいけれど、今のところまだ倒れてはいない。おばあちゃんと仲直りできたからかもしれない。

「まったく、あの年であんなに熱々じゃ、こつちがたまないわよ」なんて、東さんが電話でばやいていた。

ハルとは、あのあとあまり変わらなかった。

いつもどおり、毎朝襲撃に来て、ぎゃあぎゃああさわいで遊びに行つて。

……ただ、遊びに行く時に手をつなぐようになって、それからたまに、ほかにはだれもいないとき。
……あのおまじないを、するようになった。

「……で、手紙はなんて書いてあったの？」

ぼくの質問に、ハルは手紙をひらひら振って、

「『夏休みの旅行の続き、しませんか？』だってさ」

机の上に、手紙を広げる。

手紙の中には、おじいちゃんとの生活のことや、駿君や東さんたちのことが、ていねいにわかりやすく、あたたかく書かれていた。そうして、その長い手紙の最後には。

「遙ちゃんも周哉くんも、まだ夏休みは残ってますよね？」

あの時のお詫びをしようと思います。

ちゃんとお父さん達の許可も貰ってありますし、駿も会いたがっています。

切符を同封しますので、もし都合が良ければまた遊びに来てくださいね」

との言葉と、長くてかたい二枚の切符。

「新幹線の切符だ！ちゃんと往復、二人ぶん入ってる！」

ハルと顔を見合わせて。

にんまり笑う。

それから切符をひつつかんで、二人で一緒に走り出した。

父さん達の気が変わらないうちに、さっさと準備して行かなきゃいけない。

ハルの手を握って、階段を駆け下りる。

「あの時いけなかったところ、みんな回ろっね！」

「今度は邪魔も入らないだろうし、全部回れるよね」ハルの言葉に、

うなずいて。

「じゃ、いこうよ！

……今度も二人で！」

おしまい

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6186o/>

だいぼうけん

2011年1月4日18時46分発行